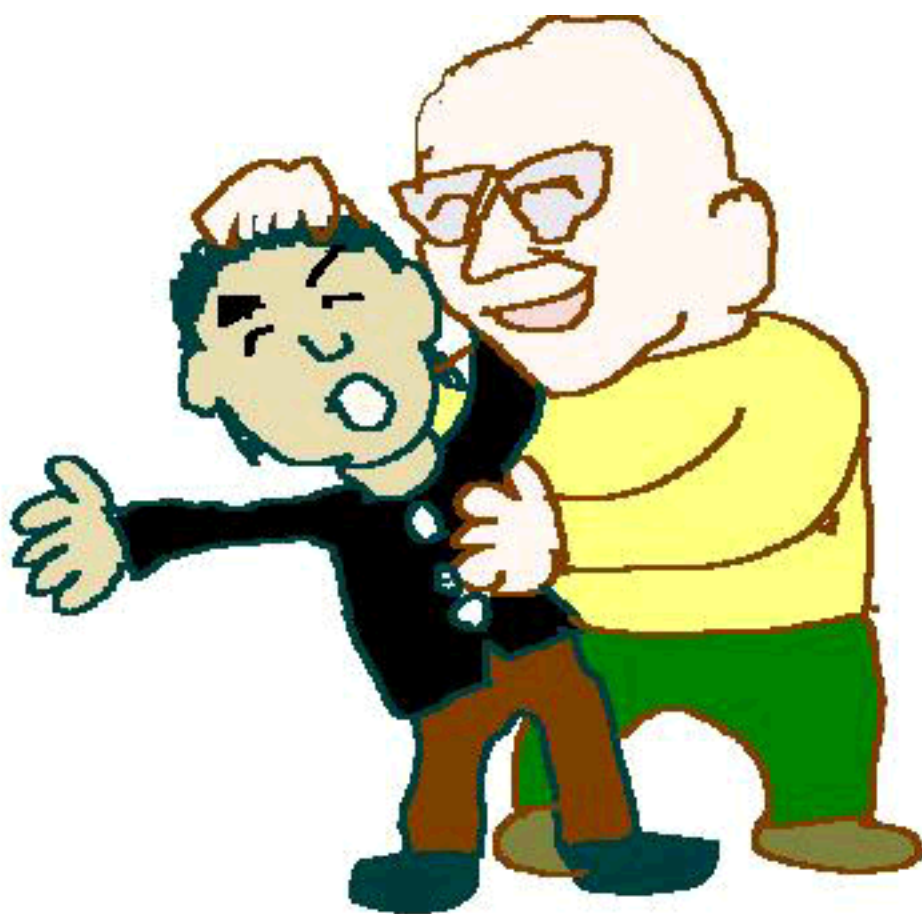


ジュール・ベランジェさん の思い出



東京ラ・サール学生寮OB会
ラ・サール会
平成10年12月



表紙絵「ヒゲ地獄」松本修一（16期）

目次

偉大な心を持った人	ブラザー・アンドレ・ラベル	1
「ジュール・ベランジェさんの思い出」	東京ラ・サール学生寮OB	2
4期	守屋 義雄	2
4期	塚越 惇	2
4期	水野 公宣	3
6期	江島 勇蔵	4
7期	泉 堅二郎	4
7期	鳥谷部 清忠	5
8期	内山 健三	5
8期	相馬 宏男	6
8期	安部 眞一	7
9期	喜多 一憲	8
9期	庄司 俊明	9
9期	宮川 龍一	9
13期	清水 欽次	10
14期	嶋田 道也	10
15期	田中 守	11
15期	村上 丘	11
15期	有馬 寛	11
16期	奥寺 元嗣	12
16期	松本 修一	12
17期	井口 如信	13
17期	江口 公平	13
17期	森 正明	14
17期	前田 良三	15
18期	守山 隆敏	16
18期	沖崎 章夫	16
19期	斎藤 泰晴	17
19期	藤井 徳久	18
19期	茂 牧人	19
19期	古橋 英敏	19
21期	岡田 総太郎	20
21期	明珍 美樹生	21
21期	梅田 恭正	21
21期	平井 憲男	22
21期	森山 勉	22
22期	野片 義也	23
	ブラザー・ジュール・ベランジェの略歴	25
	カナダ・ケベック周辺の主な地名	26
	中国・満州の主な地名	32
ブラザー・ジュール・ベランジェの伝記	ブラザー・フィリップ・ラポワント	27
訳者・編集者後書	嶋田 道也	46

偉大な心を持った人

ブラザー・アンドレ・ラベル

嶋田道也 訳

このたびは、ブラザー・サルト・ベランジェの伝記を、フランス語から日本語に、寮生みずから翻訳されたことは、とても素晴らしいことです。そして、東京の学生寮のOB達が、たくさん思い出を寄稿して下さいました。これも、ブラザー・ベランジェの影響がどんなに深かったかということですね。ベランジェさんと同じ屋根の下で生活した頃のことは決して忘れることはできません。そう、ベランジェさんはそういう人です。この文集に参加した人たち、そして特に翻訳にかかわった人たちに心から祝福の言葉を捧げます。

ブラザー・ベランジェについて、私の心に一番強く残っていることは、彼が、偉大な心を持った人であった、ということです。彼は、日本と日本人が大好きでした。強制収容所ではずいぶん辛い目に遭いましたが、それでも日本への愛着は変わりませんでした。彼は、仙台の養護施設の園児、函館の寮生、そして東京の「ラ・サール・ハウス」の寮生に、一生懸命に尽くすのを心から喜んでいました。

ベランジェさんは、寮生のためには、時間を惜しみませんでした。そして毎日みなさんのために働きながら、寮生をからかったりもしました。これが彼が温かい人間関係を作る秘訣だったのです。ブラザー・ベランジェの特徴は、人をからかって無邪気に笑うことでした。病気が進行して最後の時が近くなり、日野の寮生達ともう一緒に過ごすことができなくなってからは、皆さんのための祈りに多くの時間を割いていましたよ。それから麦の穂学園の後援会を寮生が続けていることをとても喜んでいて、この奉仕活動がうまくいくよう願っていました。

今、ベランジェさんは神様の近くにいますので、きっと彼は私たちみんなのことを神様をお願いして下さいていることでしょう。私たちと私たちの愛する人達が健やかで幸せにすごせますように、と。

今日も、昔と同じように、ブラザー・ベランジェは微笑みをたたえています。そしてベランジェさんは、私たちをからかいながら、私たちに、がんばれ、がんばれ、と応援してくれているのですよ。

4期 守屋 義雄

当時は確か土日のみが麻雀許可日であった。日曜の朝、初台教会から帰ると朝食を大急ぎでかき込み、我先にと麻雀卓へ座ったものである。小机を2台並べ、古毛布をかけた雀卓であった。牌はM氏寄贈の古いもので、黄色いナップサックにがらりと入れておいた。常連メンバーは私の他、M氏、S氏、T氏、H氏等であった。

じゃらじゃら始めるまもなく、ブラザー・ジュールがやって来て「又、麻雀」と言いつつ私の後ろに来て、両腋をくすぐるのです。「何するの」と大声を上げ、身体を擦るのを見て喜んでいた姿を思い出します。又、ある時は黄色いナップサックが見当たらず、「犯人はジュールさんだ」となり、談判にいくと「麻雀？知らないよ」と一応とぼける。「ブラザーが隠したのはわかっているんだから、早く出して」と食い下がると、ニヤニヤ笑いながら、隠していた自分の部屋から出してくれました。

この様にいたずら大好きなブラザーでした。私が真面目だった(?)せいだけでなく、本気に怒られた記憶は一度もありません。本当に心温かい思い出ばかりです。

あの笑顔を思い浮べると懐かしさで涙が滲んで来ます。この人こそ「神様の申し子」「子供のような純粋な心を持った人」「間違いなく真直ぐ天国に行ける人」と、当時思ったものでした。

4期 塚越 愼

私どもの頃は、誰もベランジェとは言わず、ジュールさん、でした。ブラザージュールと言う言い方も殆どしませんでした。

ジュールさんについて思い出す事、その最大のものはスキンシップです。あの大きな顔が近づいてきて、髭一杯の顎を押し付けて来るのです。時には髭が痛くて悲鳴を上げる事もありました。前任の舎監が厳格過ぎると言われていたため、寮生の誰彼となく、このスキンシップによる触れ合いを心掛けていたものと思われまふ。特別な感情を感じた人はいないと思いますが、その底にあるジュールさんのとてつもない善意の心を誰もが感じたと思います。

その後、私も色々な外国に行って、異なった肌と習慣の人々と触れ合い、仲良くなりましたが、此処までの善意を表現する事は到底できない訳で、異国で此処までやったジュールさんに、後になってから、すごいものを感じました。聖なるものとは何か考えるとき、このとてつもない善意もその一つなのかと、今でもふと思います。

スキンシップのその2はあのお風呂です。何回一緒に入った事でしょう。懐かしく思い出されます。脱衣場に於いてあのふんどしを自慢気に見せてくれたこと、忘れられません。ジュールさんの大きなおなかと白い肌、また、当然の事ながら男のしるしにも目が行く訳で、寮の風呂とともに、おぼろげに思い出します。寮生活で、男同志の開けっぴろげな交流と言うものがどんなものか、体得しましたが、そこに裸の外人がいた事で一層精神の開放が実現したのではないかと思います。

ジュールさんの話す日本語が非常にユニークな事も懐かしく、特に"...の形、"...タバコを吸うのは良くない形よ..."と言う表現が独特で、忘れられません。私は大学時代にフランス語も勉強していたので、もっとジュールさんにフランス語を教われば良かったのにと、大変悔やんでいます。私のつたないフランス語でも、ジュールさんの読んでいる本の高級な事は良く分かりました。一見、支離滅裂で、人が良いだけの人、いつまでたっても日本語の上手にならない人、と言う印象を受けた人もいたようですが、実は大変な勉強家で、自己犠牲の出来る人ではなかったのかと考えています。

他にも沢山思い出がありますが、私が会社に入って結婚した時の事です。寮を出てから10年近く経っ

ていたのですが、当時大船の小さな社宅に暮らし始めた新婚生活をのぞいて見たい、との事で、来てくれました。上手く行きそうかどうか心配だったのかも知れませんが、正直言って、電話を受けた時、ちょっと有難迷惑な感じが、心をよぎった事を否定出来ません。でも、あの魅力でワイフともすっかり打ち解け、本当に楽しい一時を過ごし嬉しく思いました。今となっては夫婦の楽しい思い出の一つです。

そして私の最後の思い出は、羽田空港でのお別れです。当時、中華航空のみ羽田発だったのではないかと思います。手術後で人工膀胱をつけていたそうで、やつれて小さく、細くなってしまったジュールさんの、ジュールスマイルが最後の思い出となりました。例のお髭のスキンシップも弱々しかったのか、良く覚えていないのが残念です。

4期 水野 公宣

初代の舎監マルセル・クルーさんの後任として、ジュールさんが着任されたのは多分夏休み明けだったと思います。

前任者のクルーさんは、アイスホッケーの審判までしたことがあるというので、スケートの腕は大したもの、われわれは、新宿コマ劇場前のオデオン・ビルの最上階にあったスケートリンクに一緒にいったこともあります。

しかも、たいへん知的な人で、われわれは一目おいていました。

ところが、ジュールさんは、クルーさんとは似ても似つかぬ人でした。

帰省先から寮に戻った私に、寮友がそのことを困った顔で話してくれたのを覚えています。

そして、何が原因だったかも、忘れてしまいましたが、われわれは、ジュールさんと意見が分かれてしまった。数週間、あるいは、1ヶ月以上も、この不和は続きました。

そのときの私は、「人間」だったか、それとも「農奴」だったか、それも覚えていませんが、私の性から考えると多分に突っ張っていたような気がします。

それでも、私がジュールさんのために毎晩お祈りしていることを寮友の誰かがジュールさんに話したらしく、ある日突然、私は、彼の「ほほずり」の挨拶を受けました。大体、この挨拶の仕方も、みんなの受けが悪かったのですが、その受けの悪さとは逆に、何となく、憎めない点がいくつかあって、どうも、われわれは、彼と、少しずつ和解することになって行きました。

この憎めない点は、まずは、言葉です。たどたどしい東北弁で、これが、関西弁も、河内ことばあたりだったら、われわれの和解は、かなり長引いたに違いないと思われれます。

次が、酒です。これが強い。なにせあの体でしたから、オロチのようなものでした。ビールとかワインしか飲まないという、お高い外人ですが、焼酎も飲んだから、恐れ入りました。どうも、酒は、警戒心を弱くするようです。

極め付きが風呂でした。われわれ寮生と一緒に風呂にはいるというので、これには参りました。みんな嫌がっていましたが、これで、完全に戦意を喪失してしまったのではないかと思われれます。

このジュールさんで驚いたのは、冬休み中だったと思いますが、帰省しないで寮に残っていた何名かと一緒に山北まで車で連れていってもらったときです。なんと地元のおじさん、おばさんと親しげに話をしだしたのです。確か、プティ管区長も一緒でしたが、ジュールさんの独壇場だったような気がした。

ジュールさんの没後、これが疎開中の出会いだったことを知ってなるほどと納得しました。「日本に骨を埋めた人」そんな実感のする人でした。

6期 江島 勇蔵

”我が青春のいや人生の宝物”それはブラザー・ジュールの”ピスピコース”(小便して寝なさい)とあの厚い胸に抱きしめられての”ひげの痛さ”

ブラザー・ジュールの思い出断片

・1964年11月29日 私の20歳の誕生日の夜のこと。

11時を過ぎて、ある先輩がトリスのポケット瓶を持って(特別の日以外普段は酒は禁止だった)私の部屋へそっとお祝いに来てくれた。そこへブラザーのピスピコースの夜の見回り?!慌ててポケット瓶を布団にかくし、ブラザーの去った後楽しみに瓶を出したら、フタがよくしまっていなかったので全部布団が飲んでしまった。あんな残念な事はなかった。今でも忘れられない。あれ以来酒が大好きになった。

・1965年 秋 私が寮長の時の日光での寮生一泊旅行のこと。紅葉の美しさに酔ったこともあってか、あの夜は異様に盛り上がり、十二分にあった酒もあつという間になくなった。ブラザーから「もうやめなさい」と注意を受けたが、我々は隣の宿屋へ交渉にいき、さらに2~3本酒をもらってきた。

ブラザー:「酒はそんなに泥酔する程飲むものではない」

寮長(私):「若い時は徹底的に飲んで、自分の限界を知ること必要なのでは」とくっつかかる。

ブラザー:「泥棒をして泥棒の悪さを知ることと同じだ」

寮長(私):「ギャフン」

あの晩は本当によく飲んだ。ある寮生は、あの時便器に顔を痛打、前歯折る。

今もって二日酔いの時は、ブラザーのことを思い出す。

・1966年春 ジュールさんが 千葉県館山市の我が家を寮生2名と訪問。我が両親は普段大変お世話になっている方だし、又初めての外人の訪問とあって大張り切りで酒・肴を用意。ブラザーめずらしく酒を痛飲、赤くなる。ブラザーがトイレに駆け込み少々もどすのを初めて見た。 ”ブラザーも人の子?! ”

・1963年春 公教要理の時、”日本人はそんな風には考えない”というようなことを言ったら”私は貴方が生まれる前から日本にいたよ”と言われ返す言葉がなかった。

ブラザーがどうしても言えなかった日本語は”おたまじゃくし”で”たまじゃくじい”と言っていた。

”ほや”を愛し、”禪”をした本当に日本人的な愛すべき、尊敬する変な外人だった。

”悪いのかたち”といつもおこられてばかりいたが、父親のようにいつ迄も心の中で生きています。

7期 泉 堅二郎

ブラザー・サルト・ベランジェ先生と私の親父とは不思議な縁で知り合いであった。私はこのことはラ・サール学生寮にはいるまで知らなかったのだが、簡単に述べると親父は戦前満州の奉天に勤務しており、宣教のため遙かカナダから日本経由で中国へ来ていた若いブラザー達と同じ教会に通っていた。家が教会のすぐ近くだったので頼まれて日本語を教えていたそうである。そのうち戦争が激しくなり、ブラザー達は日本に引き揚げた後捕虜収容所に入り、戦後いったんカナダへ帰った。私は奉天で生まれたのでもしかしたらブラザーに会っているかもしれないと考えてみたが、生まれたのが昭和20年なのでその可能性はない。

ということで私は昭和39年4月桜の満開の頃、ジュール先生に始めて会い、卒業までの4年間青春真っ盛りの時代を先生にお世話になった。

いろいろなことがあったが紙数に制限があるので、私が接して感じた先生の特徴をあげることにする。

1. いつも明るい いつも大きい声で元気がいい。
2. わる気がない 無邪気、純真、子供っぽい。
3. 人に親切 風邪を引いたらすぐ薬をくれる、元気がなさそうな人にすぐ声をかけて元気づける。

4. 行動的 いつも体を動かしている、どンドンと足早に歩く。壊れたところを直すのが好き。
教会でお祈りはしていたがじっと本を読んでいるのはあまり見なかった。
5. いたずらが好き よく冗談をいう。電話の時「 さん（彼女）から電話」とうそを言う。
6. 怒るときもある。 怒ると自分の筋を曲げない、頑固になる。
一度夜遅くまで飲んで騒いだ時すごく怒っていた。寮長以下が謝りに行って許してもらった。
7. フランス語が一番と思っている
フランス語は世界でもっともすぐれた言葉であると何度も聞かされた。

あれから30数年が過ぎたが、代々木上原の寮生活の思い出は尽きない。

ジュール先生は今頃天国のラ・サール学生寮でせかせかと歩き回っているのではないだろうか？ 幸せな人、人を幸せにする人、本当にありがとうございました。

7期 鳥谷部 清忠

私が、代々木上原の"ラ・サールの家"に入寮したのは、1964(昭和39)年、東京オリンピックが開催された年である。

その当時のBr. ベランジェ(当時は、ジュール先生と呼んでいた)は、幾つであったろうと考えてみた。多分、今の私どもの年齢と余り大差はないと思う。

確かに、修道士と、今、不況に喘いでいる会社員としての私どもとは立場、環境が違うでしょうが、ジュールさんのあの何とも言えない子供の様な柔らかい感情で人に接することは逆立ちしてもできそうにもない。

私は、日野でのジュールさんの"お別れ会"が行われるまで、かれは子供の純な心を持ったいたずら好きで且つ兄貴、親父のような人と思っていた。

例えば、彼は、戦時中の富士の強制収容所での話を時々され、食べ物がなく、お腹が空いたので畑からスイカを失敬したら、日本の兵隊が向こうからやってきたので、長いロープの下にスイカを隠し、雪隠状況で難を逃れたと笑っていたことを記憶しているが、常に笑いとともにという印象が強い。

しかし、お別れ会でジュールさんと交流のあった信者の代表の方の追悼の辞で、"信者は、神の戦士であり、布教や正義のためには死をも辞さずに戦わなくてはならない(多分、こういう意味合い)"との師からのメッセージが披露された。

この追悼の辞は、彼の笑いやいたずらについて深く考えさせる問い(メッセージ)として私どもに投げかけられたのではなからうか。

でも、彼は、天国で、酒を愛で、いたずらを重ねながらも、私ども寮生を、やさしい目で、いつも見守っていてくれると固く信じている!

PS. 彼は、酒で酔っぱらって、天国の階段を踏み外して、痛い、痛い、と言いながら現れるのではないか? そのためにも、修道院や各人においては酒・肴を用意して門を開けておく必要がある。

8期 内山 健三

昭和40年春、東京に出て来て、当初は、ある代議士の家に半ば書生の一人としてお世話になっていたが、あまりにも面倒見がよすぎて、かえって居心地が悪く、他に適当なところがないか、探していたところ、高校時代の友達から、「兄がいた、代々木の寮が8名卒業生がでるため、補充の可能性が有る。面接だけでも受けてみないか。」と言ってもらったのが、ラ・サール寮との付き合いの始まりであった。寮則の内容を聞き、とても自分には守れそうに無いと思い、若気の至りで、いいたい放題の事を言って、断られようと思っていたが、「入寮を許可する」といわれ、1~2ヶ月居て、出て行くつもりで入寮した。

最初の日に、いきなり、ジュール先生の、「ゾリゾリ抱擁」の洗礼を受けるわ、ミサはあるわ、で、純日本の生活環境しか経験していなかった、自分としては、全く驚異の世界であった。

ところが、寮生が実に楽しい仲間である事、寮則が思いの外、流動的で有る事、そして、この「外人」が、自分以上に日本人であることが、折りに触れて、判明するにつれ、ラ・サール寮に卒業まで在籍したいという思いが、だんだんと深くなっていった。

その後、公教要理でのジュール先生との様々な会話を通じて、また、博多の実家にお見えいただいた時以来の、我が家の家族との、懇親を通じて、先生の大きさが、益々感じられるようになってきた。カナダに生まれたフランス人が、どうして戦前の日本でとけ込む事が出来たのか、戦後の混乱期に仙台という地方で全幅の信頼を得る事が出来たのか、そして、小生意気な学生を相手にあれほど、純真に誠実に、対処する事が出来たのか。こういった諸々の疑問と、先生自身の、いわゆる「懐の深さ」は、私のそれまでの経験からは、理解できない事であった。

結局これは、宗教、人種、とかに関係なく、彼個人が持って生まれ、さらに、徹底的に自分を磨きあげた、結果であるとしか考えられない。このような事が有り得る事に驚くと同時に、何とか、少しでも彼の域に近づきたいと、それなりの努力を自分なりに続けて来たが、「日暮れて道遠し」の状況である。「天国にまします、ジュール先生、少し手を差し伸べてくれませんか。」とつぶやきたい心境である。

特に、残念なのは、私の家族が、特に子供達が、先生と直接接してその人間の大きさに触れる事が出来なかった事である。まだまだ時間が有ると思って、その機会を実現しなかった事がくれぐれも悔やまれる。この、文集や、先日頂いた、記念誌によって、少しでも補えれば有り難いと思う。

8期 相馬 宏男

「ウィーン、ブブー」芝刈り機の音が今日も響く。見る見る間に上原の修道院の庭がきれいになっていく。ブラザー・ジュールは、黒い僧服のまま、この作業に取り組んでいた。身体の大きいジュールさんでしたが身軽な動きは、芝刈りの際にも発揮されていた。

ある時、学校をさぼって寮にいた時、いつものあの「ウィーン、ブブー」という音が聞こえてきた。いつも、面白そうだなと思っていた私は、機会があったら一度やらせてもらおうと狙っていた。「ジュールさん。僕にもその機械で芝を刈らせてください。」そういうとジュールさんは、一瞬、眼鏡の底からキラリと目を光らせ、「芝は刈ってもいいが、足刈らないようにね。」という、機械のレバーを渡してくれた。きれいに、刈るにはコツがあるようで、はじめは機械が重く感じられた。時折、小石もはねあげ一緒に草とともに飛ばしてしまう。それでも、一～二分するとジュールさんほどではないが、真っすぐに芝を刈ることが出来るようになった。

それから数日後、夕食が終わって部屋にいた時のこと、いつものように、廊下にジュールさんの革のサンダルの音が響いてきた。結構パタパタと大きな音で、すぐ、ジュールさんであることがわかる。「ピースピークシュ」（私はフランス語を一応勉強はしたが、今となっては遠い彼方に消えてしまって発音が正確には思い出せない）「小便して寝ろ」と各部屋を回ってくる。一言、二言ことばを交わしながら寮生の健康状態や機嫌を見極めていたようだ。私の部屋に入ってきて、少し暗い顔をしている私を見て、「相馬君、どうしましたか、ピースピークシュ」と例のことばをかける。青年期のこの時代大した理由もないのに世の中を斜めに見たり、人生を悲観的に見がちで、私の暗い顔も特に原因があったわけではない。そんな顔を見たジュールさんは、「プチュ」とキスをして「元気を出しなさい」と声を掛けて隣の部屋に行った。あの大きな顔の横の髪はまさにジャリジャリで、とても痛かった。でもその痛みは何か柔らかいそんな痛みでもあった。

寮には、中学、高校で一緒だった鳥谷部君の紹介で入ることができた。私は、一年浪人をしたため寮では、一年後輩となった。

そんなある日ジュールさんはそれぞれの寮生の実家を訪問することになった。私の家は青森市、鳥谷部君と同郷、同じ青森にもう一人中村さんもいた。

親父とおふくろに「今度カナダ人の修道士遊びに来るよ」と話したところ、「何を食べさせればいいんだろう」から始まって「布団どうしよう」などなど疑問が次から次へと出てくる。私たちは普段一緒に生活しているのでまったく問題はないことを知ってはいたが受け入れる、外国人をほとんど知らない父母にとってはまさに青天の霹靂だったことだろう。秋のある日ジュールさんは背広姿とカラー付きの姿で北国青森にやってきた。あいさつもそこそこに夕食となった。心ばかりの土地の名物、魚や煮物とにかく全部箸をつけそしてよく飲む。酒好きの親父も安心したようで、津軽弁を少し標準語に近くして盛んに質問している。母の表情にも、日本人と何も変わらないほっとしたものが浮かんでいた。ジュールさんは、日本の大して裕福ではない家庭の雰囲気ですっかりなじんで夜遅くまで話していた。大きな声。笑い。笑顔。目が今でも私の脳裏に浮かぶ。

地方勤務の多い仕事だったのでジュールさんの病気やカナダへの帰国の際も聞いてはいたが、東京へ駆け付けすることはできなかった。

後年、仕事で西海岸ではあるが、カナダに滞在し、日本語表現や日本事情を教えるという経験をした。カナダの大らかで、自然の景色がああジュールさんを育てたんだ。そう思いながら暮らした。大きくてやさしいそんな人だった。

ブラチヨンの思い出

8期 安部 眞一

そうですねー、ブラチヨンが亡くなってもう20年以上になるんですねえ。今でもブラチヨンのことを思うと、スータンを着た姿が思い浮かびます。まるでお化けのQ太郎のようにかわいらしくて、何か獲物を見つけると「どしたの、ボウズ（鳥谷部さん）」とか「どしたの、ー」とか言いながら手を揉みつつうれしそうに近づいていって例のスキンシップを浴びせまくる、あの笑顔が即座に浮かび上がってきます。

しかし、僕は初めてブラチヨンにあったときのことをよく覚えていません。大学を受験しに初めて上京し、上原の寮にご厄介になり、そのまま寮に居着いてしまったようなものでしたが、やはり神経質な顔をしていたのでしょう。ブラチヨンは人の心理状態を見る天性の感があったと思います。

寮は楽しかったですね。いろんな大学のいろんな人がいて、あれが良かったですね。僕らの時代は、江島さん達が仕切っていましたね。江島節がまた良くて。ボケてもいいから長生きしてー。有馬さんは上品で純情で、気配りの人でした。凡さんには入学したてに上原の下のパチンコ屋につれていってもらい、教えてもらいました。関西弁がかっこよくて。松延先輩の豪速球、すごかった。野球大会は大勝利。私、ホームラン。当然、夜は祝勝会。女の子の話で盛り上がり、しょっちゅうコンパをやって、やったあとでコンパの名目があるという楽しいものでしたね。そのコンパに必ずブラチヨンはいましたね。飲み過ぎることなく、はしゃぐことなく、にこにことして、しかし、春歌には耳ざとく、「なに、ジュンゾー（鈴木さんのこと）、ナニウタッテルノ?」、恐れ入りました。あれは相当聞いているね。でなきゃ、あんなに即座に反応できないよ。おまけに、「サケハ社会ノ道具デース！」エライ、ヨクワカッテラッシャル!

ブラチヨンとの楽しい生活は2年で終わり、彼は函館へ行ってしまいました。そこで、庄司君と二人で「3年生の夏休みにブラチヨンのいる函館に遊びに行こう!」。大沼のジンギスカン、おいしかった!

我々の4年生は大学紛争でした。寮も大変でした。ま、それはともかく、寮が移転するというので、お茶の水の旅館に移り住み、パチンコしながら、そのまま卒業だったっけ?

ブラチヨンが鹿児島にいるとき、遊びに行きました。葛藤がありました。私は大学院に進み、博士課程から京都に行きました。76年から熊本大学に職を得ました。それで、ブラチヨンとは離れてしまいました。

フィリップ先生の書かれたブラチヨンの伝記(すばらしいものです)によって彼の最後を詳しく知ることができました。感動しています。何度読んでも感動します。あんなに人のために尽くすことができる人

がいるなんて。

84年にアメリカに留学し、夏に家族とモンリオールにブラチヨンの墓参りに行きました。案内してくれたブラザーが「今奥さんが立っているあたりにブラザージュールは眠っています」と言いました。2段ベッドの下だそうです。そりゃそうでしょう、上だったら下の方がかわいそうです重すぎて。亡くなってからも心配りの方ですね。モンリオールの修道院は、普通のおうちみたいで、高齢のブラザーが多くて、でも皆さん明るくて、うちの子供もアイスクリームをもらって喜んでました。

有馬さんともニューヨークで会って、ブロンクスの動物園に家族を連れて行ってもらいました。また、ニューヨークに有馬さんを訪ねて遊びに行こうかと思っていたら――。佳人薄命。私長生きしそう。ブラチオンは私の心の中に永遠に生きています。

9期 喜多 一憲

大学受験で上京する際、函館のブラザー鈴木から上原の寮での宿泊を紹介され、ついで入寮の面接をすすめて頂いた。旧華族の屋敷だったという修道院の隣にある学生寮で最初に出迎えてくれたのがジュールさんだった。終始ニコニコ笑顔で「ドウゾ、ドウゾ、ガンバツテクダサイ。」の歓迎を受けて、一週間ほどお世話になった。その短い間でのジュールさんの印象といえば、表情はニコニコ笑顔と馬の嘶きのような笑い声、言語は早口のフレンチ風ジャパニーズで、歩く姿は馬が早足で歩いていると言った図、極めつけは一緒に風呂に入ったとき発見した禪であった。それまで何人ものブラザーや神父に出会っていたが、それでもやっぱり「ヘンな外人」だった。

しばらくして本命の大学から不合格知らせが来たので報告に行った。ジュールさんはいきなり私の背中に腕をまわして抱き締め、「ザンネン、ザンネン、寮生も皆デ待ッテイタノニ、マタ来テクダサイ。」と。どうも入寮が内定していたようであった。その後別の大学から合格通知があって、やむなく入学することにした。玄関先でその旨言うと「ヨカッタ、ヨカッタ、」とその場で私を抱え揚げ、固い髭での頬ずり（これを「ヒゲ地獄」という）、果ては顔中にキスの嵐の洗礼を受けた。一瞬面食らったが、放蕩息子を迎える父の場面で頭をよぎった。（決して私は当時は放蕩はしていなかったが。）ジュールさんはその日常において聖書の世界そのものを体現していたことは言うに難くない。その態度表現は時に荒っぽかったが。

こうして私はめでたく？入寮することとあいなったが、その年の秋にジュールさんは函館へ赴任することになった。その後私は帰省した際、母校訪問というよりジュールさんに会いに行った。もちろんアポを採って午後お伺いすることにしていた。母校にはちょっとだけ顔を出してすぐさま寮の舎監室に直行した。ドアをノックして開けると3、4人の寮生と歓談していた。私を確認すると「ヤー、喜多ガ来ター、サー、皆出テ行ッテ、シッ、シッ」と寮生を舎監室から追い出してしまった。二人きりになった部屋で再会の談義を始めようとした矢先、「喜多クン、風邪ヒイテマスネ」と念押しするようにして言って立ち上がった。別段私は健康体そのもので怪訝な思いであったが、ジュールさんが芋焼酎を抱えてきたときに納得した。東京の学生寮では自室へのアルコールは持ち込み禁止であったが、風邪薬と称して夜な夜な所望して日参したものである。昼下がりのまだ陽も落ちていない中、二人だけの酒盛りが始まり、なつかしの語らいが続いた。陽もとっぴり消えて私はタクシーを呼んでもらって家に帰ったが、赤い顔したジュールさんは、その後修道院に帰ってお咎めを受けたかどうかは定かではない。

私は現在愛知県で、ジュールさんがかつて園長をしていた仙台のラ・サール・ホームと同じ児童養護施設で働いている。2歳から20歳までの子どもたち相手である。今私はヒゲを蓄えていて、歓迎と喜びと祝福を「ヒゲ地獄ダゾー」と頬ずりしながら子どもとのコミュニケーションを図っている。その時はもちろんジュールさんの姿を彷彿している。ジュールさんの打算のない感情表現は私にとって大きな財産であり、人間関係性の本質を教えて頂いたと感謝そのものである。ジュールさんが日本人に同化しようとしてもなりきれなかった不器用さも愛敬であり、そのことも私にとっては救いでもあった。決していわゆる聖

人然としてではなく、いと弱き者、いと小さき者、そしていと貧しき者と共にあったということからすれば、今、神様の側で至福を得て、私達を見守っていてくださっているのだらうと思わずにはいられない。

9期 庄司 俊明

私が代々木上原にあったラサール寮に入寮したのは1966年のことです。上原の駅から商店街の続く坂道を登って、立派な洋館の様な修道院に圧倒されながら寮に入って行くと、恰幅の良いブラザーがでて来て、抱きすくめられ、ひげでほっぺたをごしごしこすられるという荒っぽい歓迎を受けました。それが寮の舎監をしていたブラザージュールとの出会いでした。これが彼一流のあいさつの仕方だとわかったのは後のことです。ジュールさんとは一年間上原で一緒に暮らしました。しかし、函館のラサール高校の寮の舎監をやることになってジュールさんは二年目に函館に移り、代わってラベルさんが舎監として上原に来ました。この時期はラサール寮にとっても大きな変動の時で、寮は上原から日野に引っ越すことになり、ラベルさんも随分と大変だったと思います。私達が4年の春に上原を引きはらうことになりましたが、日野の寮はまだ未完成で、白山下は西片の安ホテルに二ヵ月程仮住いをしました。樋口一葉の暮らしていた辺りです。薄暗い部屋で一日中麻雀の音が響いていました。

私が寮にいた4年間はまた学生運動が日本を揺り動かした時でしたが、上原での一年目はまだ静かで、楽しい時を過ごしました。当時私はカトリックに距離をおいていましたが、ジュールさんを通して修道士というもの（多分に変な修道士という意味もありますが）血の通った実体として受け止めることができた様に思います。ジュールさんは寮生と一緒に風呂に入るのが好きでしたが、頭にタオルをのせて鼻歌混じりで湯舟につかり、風呂からあがれば、浴衣にふんどしを愛用するといった調子で、これぞ真の日本人という趣きがありました。寮生のすることには寛大でしたが、筋を通すところは厳しく、私達が酔っ払って渋谷のピアホールからジョッキをまとめて失敬してきたときには、「これ良くないの形ね、悪いの形よ」と言われて翌日皆で返しにいきました。

ジュールさんが函館に移った年（かその翌年）の夏に一年上の安部さんとふたりで函館を訪ね、ラサールの寮に一ヵ月居候をしたことがあります。ブラザーには随分良くしてもらいました。寮の食堂で毎日ただ飯を食べさせてもらい、自転車を借りて、一ヵ月の間、函館の街をあちらこちらと乗り回していました。何かの折に、ブラザーと二人で電車に乗っていて、年配の乗客にからまれそうになったことがあります。ジュールさんは上手に受け流していましたが、言葉の端々から戦時中の苦労が垣間見えて、その重みは相手にも伝わっていた様でした。私はその時ジュールさんの日本での長い年月と体験を、自分の生きてきた時間と比べて、自分とブラザーとどちらが本当の日本人かなという感慨を押えられませんでした。それから30年経ちますが、ジュールさんの前ではきっと今でも同じだらうなと思っています。

9期 宮川 龍一

拝啓

嶋田君、お元気ですか。先日は「ジュールさんの思い出」の原稿を送って頂き、本当にありがとうございました。何度も繰り返し拝読致しました。その度に楽しかったラ・サール学生寮時代の出来事や仲間の顔が浮かび、懐かしさで胸が一杯になりました。

ジュール先生が亡くなられて二十年の月日が経つというのに、今でも寮生の心の中に、素晴らしい思い出と共に生き続けていらっしゃるんですね。

ラ・サール学生寮で多感な青春時代を四年間、ジュール先生、ラベル先生、寮生と寝食を共にし、お互いに助け合って後援会活動ができたことは、本当に幸福な体験だったと思います。ジュール先生はいつも寮生の側において、暖かい眼差しで見守り、自らの行動を通して人間の素晴らしい生き方を私達に教えて下さいました。人を愛し、人の為に純粋に生きた善意の人でした。笑顔とユーモアを忘れず、心の暖かい人でした。寮生といっしょに酒を飲んだり、風呂で背中を流したり、髭の抱擁をしてくれたり、男同士の裸のつき合いができたことは、決して忘れられない思い出です。

私は母校の海星学園で、中学生や高校生と一緒にボランティア活動をしています。養護施設や老人ホームの訪問、障害者との交流会やコンサート等に参加をしていますが、寮時代の経験が大変役に立っています。他者の為に生きたジュール先生の心を忘れないで、若い生徒達との心のふれあいを大切にして一緒に活動していきたいと思っています。

追伸 この度の文集作り、本当にご苦労様です。寮生の宝物になることでしょう。

13期 清水 欽次

おひげジョリジョリ、風呂場の背中流し、ふんどし、みぞべ（鹿兒島のお茶）、これらの共通点を述べよ、と言ったら、正解はベランジェ先生です。

ラベル先生に続き、ベランジェ先生が舎監となりました。まずは、おひげジョリジョリの先制攻撃を受けました。風呂場では、あの広い背中を流してあげて、亦、お返しに背中を洗ってもらいました。舎監室では、みぞべ（この様な名前だと思いますが）を使っての茶話会です。小生も静岡生まれの静岡育ちで、少々お茶にはうるさかったのですが、ベランジェ先生もお茶には造詣が深く、色々話を伺いました。また、その際には、第2次世界大戦中の捕虜収容所での話も伺いました。

小生、ご存知の様に、その当時からお酒が好きで、国分寺の「月海」で升酒を飲み過ぎて寮に帰ると、「清水君、飲み過ぎると体によくないよ、気をつけた方がいいよ。」と、よく注意して頂きました。（そんなに飲んだっけかなー？）卒業後も寮にはお世話になりました。

何年かがすぎ、ベランジェ先生の体調が優れず、人工尿道を装着される様になりました。その時に一度、日野までお見舞いに伺いました。それから、間もなくカナダへ帰国、訃報の知らせが届きました。残念でした。思い出はまだまだ尽きません。

お酒を飲み過ぎたら、またベランジェ先生に注意してもらえるのかな？

合掌

14期 嶋田 道也

ラ・サール学生寮に入ってよかったことはいくつもありますが、ブラザー達との人間的なつながりを通じて、宗教や生き方について深く考えさせられました。ベランジェさんとはよくお話をしましたが、よく「超自然の存在を認めなくて、だめよ」と力説していました。当時修道院の仕事と学生寮の舎監とかけもちで、張り切って仕事に打ち込んでいた姿、力強い足取り、そしていつも微笑みを絶やさなかったことを思い出します。伝記のなかに、最後のメッセージ「キリストの光、神に感謝」が紹介されていますが、ベランジェさんは、日々の働きを通してこのメッセージを伝えていたような気がします。

ベランジェさんには、時々フランス語の質問をしました。あるとき、デカルトの方法序説を読んでいて、一つの文章で半ページにもなる長い文章にあたり、句と句のつながり具合がよくわからなかったのが、ここはどう読むのでしょうかと聞きに行ったことがあります。そうしたら、「そのところを、ちょっと読んでみて」と言うので、自分流に音読してみました。ベランジェさんはそれを黙って聞いていましたが、今度はベランジェさんがその文章を読んで下さいました。抑揚の付け方、間のとりかたで、句と句のつながり具合がよく分かりました。

モントリオールにお墓参りをしたのは、1983年の8月でした。ラ・サール会のブラザーに案内していただいてお参りを致しました。それまで、ブラザー達が亡くなると、自分の故郷の家族のお墓に埋葬されることを想像していましたが、そうではなく、ラ・サール会のお墓に入るのですね。ラ・サール会のブラ

ザー達の墓碑があり、そこにベランジェさんの名前を見つけたときは、信じたくない真実を見たような気になりました。ベランジェさんの棺が埋めてある場所を教えてもらい、芝生の上をなぞって、「ブラザー」と声をかけました。ベランジェさんはお腹がパンパンにせり出ている、小生はよくそのお腹をポンポンと軽く叩いたものでした。芝生の上ですが、ちょうどお腹のあたりかな、と思えるところをポンポンと叩いて、合掌して冥福を祈りました。案内して下さったブラザーを修道院まで見送ったのですが、帰る途中、その方の後ろ姿からベランジェさんの姿が思い出され、胸がいっぱいになって運転ができなくなり、道路の端に車を寄せました。ご冥福を祈ります。

人情味のある鉄人

15期 田中 守

門限5分前、日野駅と寮の間にある寮生ご用達の飲み処「鳥招」のマスターが、「田中君、時間だよ」と言う。さあ急げ、酒仲間の村上、山田両君と駆け足で坂を駆け登るが、途中で息切れ。やっとのことで玄関へなだれ込み、大の字になりひっくり返る。時間は22時29分。セーフ。そこに舎監室より鉄人ブラザー・ベランジェが出て来て、ニヤリ。何も言わないが、門限に間に合ったことを喜んでいるみたい。目の奥は暖かく輝いている。

寒い冬の夜中、2階一番奥の我が部屋に酒好きの寮生7～8名が集まっている。故郷から送って来た、するめを電気ストーブであぶり、何ともうまいにおいが部屋いっぱい充満する。押し入れの奥に隠していた一升瓶をあけ、みんなで乾杯。そこに、コンコンとノックの音。やばい、酒隠せ。おそろおそろドアを開けると、そこには鉄人の顔。するめの匂いを感じたのか、酒の匂いを感じたのか。思わず「すみません、静かにやります。」と言ってその場はセーフ。

思い出すと、何とも人情味があり、頼りになる、酒好きのじいちゃん先生であった。いつも暖かい目で寮生を見守ってくれた鉄人に感謝。

天国でゆっくりお休み下さい。

オールドパーの思い出

15期 村上 丘

ブラザー・ベランジェが、郡山にある実家を、何かの折に訪ねて来たことがありました。その時、私はあいにく不在でしたが、私の両親が不意の客におどろきながらも、ささやかなもてなしをしました。

ブラザーと入れ違いに帰宅した私は、来訪の様子を両親にたずねました。すると、「お酒が好きな方だ、という話は聞いていたのでウィスキーをお出しすると、それはそれはよろこんで、笑いながら、とても楽しそうに飲んでたよ。でもね、何を話しているのかはさっぱりわからなかった。おみやげに、オールドパーをさしあげると、大事そうに持って帰られたよ」——— ということでした。

それからしばらくしてから、私は母校の大学院を受験し、やっとのことで合格しました。やっとのことで、というのは、年に2回ある入学試験のうち、第1回目の際は不合格だったからです。合格の報告をブラザーに伝えると、とても喜んでくれました。そして、「今夜、修道院でお祝いするね。」とってくれました。夜、訪問すると、ブラザーは1本のウィスキーを持ってきました。「郡山でもらったオールドパーあります。」とブラザーは言いました。ブラザー、ありがとう。

15期 有馬 寛

ベランジェ先生に始めて、会ったのは、小学5年生の夏でした。当時、大学生でラサールハウスにいた兄・良平の鹿児島への、帰省時にベランジェ先生も遊びに来られ、あの＜髭＞で痛い挨拶を受けた際の、人懐っこい笑顔が、昨日の様に、覚えています。

私も大学時代を、ラサールハウスで過ごすことになり、当時も舎監をしておられた、ベランジェ先生に4年間お世話になりました。

ラサールハウスでの思い出で、今でも強く残っているのは、先生の<信仰者>としての一面です。ある時、祈りについての、話をしていたとき、「私は、電車に乗ったら、電車に乗っている人に、平安があります様に！、無事に目的地に着きます様に！と祈っているのですよ。」と祈りの生活の実践を教えてくださいました。

<信仰>の話をすると、いつも、あふれんばかりの、<主イエス・キリスト>への信仰の深さが、言葉の端々にあらわれていたのを思い出します。

先般、ベランジェ先生の追悼ミサが日野の修道院でひらかれ、多くの方がその徳を偲びつつ、参加されましたが、私の兄・良平も交通事故による不慮の事故で、7月2日にこの世を去り、8月1日に、ラサールハウスのOBの方や、ブラザー方のご協力のもと、日野の修道院で追悼ミサを行っていただきました。

今、兄を亡くして思うのは、「この世の寿命は有限であるが、信仰ある者には、来世への永遠の希望がある。」ということです。兄・良平は、寮生のなかでも、いち早く、この世を旅立ってしまいましたが、きっと、あの世で、あの懐かしいベランジェ先生と、再会して、この世での思い出を、いろいろと話し合っているのではと、想像しています。

<心>だけがあの世へ、持っていける唯一のものと信じていますが、この世での残された寿命の中を、精一杯の努力のうちに生きて、あの世へと旅立ったら、またベランジェ先生や、兄達と再会したいものだと、希っています。

ベランジェ先生の御霊に、平安があります様に！

16期 奥寺 元嗣

私は函館ラ・サール学生寮と日野学生寮と二回ベランジェ先生にお世話になりました。

函館時代 一番の思い出は入学後1～2年してベランジェ先生が東京に転勤になる時のことです。当時もちろん飛行機は飛んでいたのですがラ・サール会は貧乏だったのでしょうか、青函連絡船(古い!)と列車で行くことになりました。寮生(約400名)の大半が函館桟橋に見送りに集まりました。「ベランジェ」「ベランジェ」の大合唱とテープの嵐の中の照れくさそうなベランジェ先生の顔はいまでもはっきり覚えています。

日野時代 一番の思い出は恒例の新人歓迎すきやきパーティのときです。酒を飲み過ぎ田中 守氏とふざけているうちに玄関のガラスに体当たりをして割ってしまいました。大きなガラスだったのでたぶん数万円はしたでしょう。ベランジェ先生に謝りに行くと「自分も小さい頃 カナダで馬に乗っていてショウウィンドウに突っ込んだことがある。怪我がないのが一番。ガラス代は知らない。」と言われました。ベランジェ先生はやっぱりキリストだったのです。そして今も 我々を見守っていてくれると思っています。

僕にとってのベランジェ

16期 松本 修一

僕にとってのベランジェは、ベランジェというだけでなく、グレゴリーであり、ポアベールであり、またオージロである。

英語教師として決して日本語をしゃべらず、鹿児島島の修道院で僕たちにMonopolyのゲームやSimon and Garfunkelの歌詞の意味を教えてくれたのはグレゴリーだった。バイク好きだった彼も今ではサハリン沖に大韓航空機と共に眠っている。

夏の夜、高寮を抜け出し谷山温泉に風呂にでかけた帰り道、海岸で友と二人で夜空を見上げ将来を語り合った。帰寮すると、心配していた舎監のボアパールに大目玉と実家への手紙を食らった。

オージロには鹿児島でタイプを少し習ったことがあった。日野の聖堂のオルガンでこっそりBeatlesを弾いていた僕を見つけた彼は、しかるどころか、真面目な顔でフランスへの音楽留学を薦めてくれた。

そして、ベランジェ。君はいつでも僕たちの友人だった。笑ってくれた。抱擁してくれた。時には髭が痛かったけど。君は中国で、仙台、函館、鹿児島、そして日野で、いつでも同じように子供に接したに違いない。志を抱き故郷を遠く離れ、だからといって気負うこともなく、自然に心をつかむ人だった。

ある時、井上ひさしが仙台のときのことを語った記事を見つけると、嬉しそうに持ってきて僕に読んでくれと言った。読んだ後から、僕の言葉を何度も何度も繰り返した。今は安らかにカナダの土に眠っている君よ、今度はみんなの文章を読んであげよう。眼鏡の奥で微笑む君が見えるようだ。

17期 井口 如信

日野のラサール寮時代は、今振り返って見るに、様々な人間社会の縮図が折り重なった特殊な環境であった様に思う。寮長を中心とした先輩後輩という規範、ボランティア活動を中心とした地域社会との交流、生活を共にするという家族的な環境、夜遅くまで部屋にこもって話し込む友情関係。その中であって修道生活を基本とするブラザー達の作り出す環境からは、キリスト教信者ならぬ自分にとって、その後絶えて得る事の出来ない貴重な経験をする事が出来た様に思う。知性的なブラザーフィリップ、そして人間味溢れるブラザーベランジェに教えられた事は、その言葉の一つ一つと言うよりも、むしろ日常生活を介しての彼らの行動の中にあつた。中でも、ブラザーベランジェ、ベランジェさんは、学生寮の舎監として日々我々と接する機会も多く、その行動の一つ一つが、ある時は可笑しく、又悲しく、ある時は暖かく、あるいは厳しく、しかしそのいずれにおいても神の御前に謙虚であらんとし、常に相手の存在を肯定せんとする気持ちに満ち溢れていた。

木々の生い茂る坂道を上って丘の頂にたどり着くと、そこには広い青空が開けており修道院と学生寮が陽の光を浴びて建っている。すると、ベランジェさんが体重に似合わぬ軽い足取りでこちらに歩いて来る。'今日、早いじゃない?'あの、笑みを湛えた、助詞抜きの独特のイントネーションだ。その自然さの中には、彼自身の歴史のすべてが凝縮されている様で、ぼくはその時、何故か救われた気持ちになった事を覚えている。あるいは、恐らく寮生全員が記憶に留めている、白ふんどしとおふる。'あなた力ないねー'とキャッキヤと言いながら背中をこすりあつたその笑いの中には、いつもベランジェさんの、遠く故郷を離れて来た若者達に対する暖かい眼差しがあつた。

今、自分自身の生活はと言えば、会社を中心とした価値観の中に、家族の領域を確保するのがやっとなという状況である。あの、ベランジェさん達と過ごした日野での生活、心のゆとりと安らぎ、利己心を捨てた思いやりの世界、それらはつかの間の幻だったのだろうか? いや、ここに寄せられた多くの寮生達の記憶、ぼく自身の中に残るベランジェさんの声の響き、それらは決して幻ではなく、ぼくらの心の中に確かに組み込まれた遺伝子なのだ。それは、ぼくらの意志によって、どんな日常の些細な事柄の中にも発現させる事が出来る。と、そう教えてくれているのも、ベランジェさんと過ごした日野の生活だったのかも知れない。

17期 江口 公平

遅くなりました。拙文をお送りします。ところで、皆さんの文がまとまりましたら月海のマスターにもあげたいのですがどうでしょう。多分よろこばれると思います。皆さんの中で行かれています人もいます。月海は当時より面積を拡張しており、マスターとそっくりの息子さんも働いておられます。マスターは相変わらず入り口のところで焼き鳥を焼いています。奥さんは体をこわしてここ2、3年店には出ておられません。またもう一人のおばさんは昨年夏なくなりました。その直前まで元気に働いてお

られたのですが。

あれは確か高二の一学期、夜の12時頃、僕は空を見ながらプールに浮かんでいた。時々体が沈みそうになると手足をばちゃばちゃ動かしていた。その時、「ダレデスカ？」とたどたどしいだみ声と共に、プール脇の高二寮から人影が現れた。僕はあわててプールサイドに上がり、どこからどう逃げたか覚えていないが最後は非常階段も使って高二寮の各階を走り回った。最後は捕まらずに自室に戻れたが、なんてしつこく体力のある舎監なんだと息を切らせながら僕は思った。

これがベランジェ先生（以後、いつも使っていたベランジェさんと書かせてもらいます）に関わる僕の最初の思い出です。確かそれからしばらくしてベランジェさんは鹿児島を離れられたと思います、この2年後、日野の寮に入った時ベランジェさんのお顔を拝見した時は、気まずさよりは懐かしさの方が勝りました。今から思えば、あの時、僕はなぜ逃げたんだろう、逃げなくとも許してもらえただろうと思います。

その後の4年間、他の寮生と同様、ベランジェさんを抜きにしては語れない数々の思い出があります。布教活動のため若い時から日本に渡り御苦労されていたことなどおくびにも出さず、ちゃらんぼらんな寮生を相手にしながら（もちろん僕のことで、大多数は真面目な学生でしたが）、御自身は神に使える生活をされてこられたことは、キリスト教の教えには不真面目で朝食前のお祈りや夕べのお祈りを義務的に行っていた僕にとっては理解の範囲をこえています。僕の思い出の中では、プラザーベランジェと言うよりは、寝食を共にした寮の仲間、一目を置く仲間といった気持ちがあります。

僕は今中央線沿いに住んでいるので年に何回か国分寺の月海に行っています。ホヤを食べる度にベランジェさんのことを思い出し、一緒に行った人に、昔ホヤが好きなカナダ人がいたんだよ、とよく言っています。また、今でもお元気に働いていらっしゃる月海のマスターと思い出話しをすることもあります。

寮生活時代には寮生それぞれに懐かしい思い出があると思いますが、少なくともある時期の人々にとってはベランジェさんが共通した思い出の象徴となっていると思います。

17期 森 正明

皆さんの文章を読んでいたら、ベランジェさんと過ごした寮での4年間の出来ごとが、次々と色々と思いで出てきて懐かしさがいっぱいです。本当に昨日のこのように、日野駅で降りてあの坂を上って玄関の戸を開けるとベランジェが何か話しかけてくるといった光景があたりと目の前に浮かびます。

一人でも多くの寮生が思い出を綴ってくれればいいですね、なんて自分のことをすっかり棚上げて思っています。

私は1971年に鹿児島のラサール高校に入学し、1974年には大学入学とともに日野のラサール寮に入寮する機会を得ました。従って、高校・大学の7年間、一時期を除いていつも私の身近にはベランジェさんがいてくれたこととなります。

高校二年のとき、前半の六ヶ月ほどベランジェさんは高二寮の舎監でした（途中から日野のラサール寮に赴任されました）。このときのベランジェさんはかなり怖かった。とある深夜、近くの部屋で寮生を叱責するベランジェさんの低い声が聞こえてきて、思わずベッドの中で身を固くしていてもあります。

温厚で常に笑みを絶やさぬベランジェさんを知る多くの人たちにとってこれは信じられないことかもしれませんが、放っておけば何をしてくすかわからない私たち十六、七歳の少年たちに対し、これは全く当然な対応でした。そしてそれ故、大学に入学して日野の寮に入ったときに私を迎えてくれた殆ど無防備と言っていいベランジェさんの笑顔は私にはやや意外だったのですが、これはベランジェさんが漸く私を責任ある一人の大人として遇してくれるようになったあかしだったに違いありません。そしてその笑顔はそれ以降、どんなときでも私に向けられたのでした。

ラ・サール寮での四年の間、ベランジェさんは常にそばにいて私や私達寮生を温かく見守って下さっていました。寮のクリスマス祭であまり歌は得意ではないのにベランジェさんを引っぱり出して私たちと一緒に「中国地方の子守歌」を歌ってもらった。青柳の山荘に連れて行っていただきながらベランジェさんには料理をさせておいて私たちは酒ばかり飲んでいました。西洋的合理主義に反感を抱いていた私は生硬な議論をしょっちゅうベランジェさんにぶっつけた。などなど、今にして思えば恥じ入るばかりのことどもにいつもベランジェさんは、ニコニコしながらそして真摯に付き合ってくれました。でも、こうしたベランジェさんとのふれ合いにおいて私は一方的にベランジェさんに寄りかかっていたように思います。ベランジェさんのそれまでの人生に殆ど思いを致すことをしないでただ軽々しく向かっていただけでした。せっかくベランジェさんの人生の最後の刹那といってもいい時期にすぐ側で生活することが出来たのにこれは実に残念なことでした。

そんなベランジェさんが病魔と闘っていらっしやった頃、私は全くベランジェさんのそばから離れていました。ちょうど大学院の修士論文をまとめる時期に重なっていたのは事実ですが、それが言い訳になるとは思えません。その頃の私の冷淡さはどうしても心の中にわだかまりとして残っていて消えることがありません。ベランジェさんごめんなさい。

私には神を信じることはできません。でも、私の身近で、神を信じて神の命ずるままに行動したであろうベランジェさんを理解していたように思います。これはもしかしたら、ベランジェさんをおして神を見ていたということになるのでしょうか。勝手な思いこみですが、そのことで天国のベランジェさんはこんな私の不義理を許してくれそうな気がします。

最後に私が在寮中に作った戯れ歌を紹介することを許していただきたい。実は、これは私と同期の島貫君が作った寮歌の一節なのですが、余りに不出来であったため全く無視されてしまったのもです。

男心の純情に / 天も思わず貰い泣き / 月がなくても「ソレ問題ナイヨ」 / ベランジェの頭で月見酒

ベランジェさんとの再会

17期 前田 良三

日野の学生寮に入ったのは1974年の4月でした。それから4年間の生活は今となっては夢のようですが、そのいたるところにベランジェさんの姿が遍在しています。いろいろな意味でバランスのとれていなかった私は、何かにつけベランジェさんに甘えてしまいました。酔っぱらって舎監室に入りこみ、議論とも告白ともつかないようなことを(文字通り)吐露した夜は、ちょっとびっくりしたような愛嬌のある目で黙って聞いてくれて、翌日情けない顔をしている私に「ゆうべはクレイジーみたいだったよー」と、ただにこにこして下さった。私が学んでいたドイツ語のことを、「それ、むずかしーねー」と例の茶化すような調子で言われたことも幾度もあります。こちらがまたしても妙に小むずかしい顔をしていたのですが、そうでなくても主観的な「真剣さ」や一時的な「深刻さ」といったものに陥りがちだった私に対する、あれはベランジェさん一流のたしなめ方だったのかと、鈍い私は今頃になって気づく始末です。78年の正月はわけあってただ一人寮に残っていましたが、大晦日の夜にわざわざ部屋まで「年越しそば」と「おせち」を持ってきて下さったベランジェさんの心遣いも、今としてみると、懐かしい思い出以上の重大なメッセージを含んでいるように思われます。

それにしても日野の毎日は楽しかった。そこには常にベランジェさんから放射する何とも言えない「温波」とでもいうようなものがあって、私はただ安心して毎日を送ることができました(それは他の寮生も同じだったと思います)。「ひげの洗礼」や風呂場での流し合い、コンパに大掃除そして「夕べの祈り」と、毎日・毎年の生活の場面場面が、嬉しそうなベランジェさんを通じて伝わってくる力によって、ひとつの生き生きした連続となっていました。学生寮の生活そのものが、ベランジェさんという働きのひとつの美しい「作品」であったような気がします。入院中のベランジェさんを目白の聖マリア病院にお見舞いしたのは、すでに寮を出てからのことだったかと思えます。その後ベランジェさんの健康状態が急速に悪

化していった2年足らずの間、そしてそれに続く数年間、私は自分でも不思議なほど私自身の世界に没頭していました。それまでの共同生活から毎日自分だけに向かい合う生活に変わり、自分に対して精一杯むきになっていた時期です。79年1月にカナダに帰国するベランジェさんと別れの言葉を交わしたのが最後になりました。それから20年がたちます。私はベランジェさんの姿からも寮生活の思い出からも遠いところで生きていますが、実はその間何度もそして何人ものベランジェさんに再会したように思います（ドイツ語を話すベランジェさんにも会いました）。仕事や生活のなかで差し出された数多くの励ましと友愛に出会うたびに、私はベランジェさんの表情と「肯定しなさい」というそのメッセージを同時に受け取っています。そのことに感謝しながら、そしてその「温波」の背後にある深さと強さ、さらにはその源泉について考えながら、ベランジェさんのご冥福をお祈りします。

ベランジェのぬくもり

18期 守山 隆敏

私にとってベランジェ神父は、大学時代の寮生活でしか接することが出来ませんでした。大学時代の良き相談相手であり、また、父親のようでした。

今回、9月に学会がモンリオールで開かれ、モンリオールに行くことが出来、ベランジェ神父がこのような素晴らしいところに眠っていらっしゃるものと思いました。

墓地は、小高い丘の上であり、モンリオールの町が一望できる（オリンピック会場も見えます）ところですが、残念ながら何処にベランジェ神父のお墓があるのか聞いておりませんでしたので、周りの雰囲気だけを味わいました。

大学時代の寮生活では、毎日曜日にベランジェ神父が、御ミサのために起こしにいらっしゃいましたが、その起こし方が、頭に良く来て、（痛いヒゲ、横っ腹をくすぐるなど）うるさいなどと言ってしまったこと、また、折角起こしにいらっしゃったのですが、サボって庭でソフトボールなどをしていてコッピドクしかられ、（確か 田中清と一緒にだったと記憶しています）四谷の教会まで行ったこと（行ったかどうかは覚えていません）など、今にして思うとベランジェにかなり悪いことをしていたように思います。

ベランジェが亡くなって、月日が経つのが早いですが、今でもあたたかいベランジェの気持ちが伝わってきます。

合掌

光の焦点

18期 沖崎 章夫

アナタハカミヲシンジマスカ？ 信じない人も、縁の不思議さには思い当たるところがあるろう。

郷里大牟田で中学3年の時、友人がもしも教会に通っていなかったら、そしてもしも鹿児島ラ・サールでBro.鈴木に勧誘されなかったら、ロザリオ会（聖書研究会）へ入らなかつたらう。すると、会の先輩で、上智大学に入学し、修道院におられた木元さんからラ・サール寮を紹介されることもなかつたらう。もし、高二寮アネックスにいた友人（ベランジェのヘッドロック洗礼を受けた一人）から、小人数の寮の素晴らしさを聞かなかつたら、ラ・サール寮に魅力を感じなかつたらう。これらの"もしも"のどれか一つでも"真"（実際と逆）であったなら、私は75年3月上旬、あの丘の道を登っていない。入寮面接の翌朝、ベランジェと初めて出会った。"この寮を出た人もよく遊びにくるヨ"。まだ冷たい、でも柔らかい3月の朝の青空を仰ぎながら、ベランジェは誇らしげに微笑んだ。

間もなく、ベランジェの焼酎の洗礼。"ベランジェ、こんなの臭くて飲めないよ"。"エー？、おいしいヨオ、なんで飲めないか？"。

寮生だけでなく、様々な人々に出会った。映画の楽しみを教えて下さった健全映画観賞会の西村さん。喫茶店でくつろぐ癖をつけて下さった日野駅前のパンブーの竹川さん。日野は3番目の郷里となった。

"オキサキ、部屋をちゃんと片付けないとダメヨ。豚小屋でないヨ！"。厳しい顔で叱られた。母が寮を訪ねてきたとき、私は入室を拒否した。"女は入れない"。母はベランジェにその不満を訴えた。"アハハ、部屋が汚いのが本当の理由ですネ"と笑われた。

ベランジェにフランス語を少し教わったことがあった。舌の奥を震わせるrの発音ができないと言うと、"何でできない？ おかしいネ"と悪戯っ子の様に笑っていた。しかし、何度練習しても舌は震えなかった。

77年、藤井学園後援会の会長を拝命した。どうやって会員の強い参加を促すかに悩んでいたとき、"思うとおりにしなさい。"と励ましてくれた。如己を創刊号から全てを読んで、後援会活動の歴史を見直し、今を、そして今後をみつめ直そうと主張する如己を発刊した。会長の任期終了後ではあったが。

"の為に祈りしまショウ"。たまに出席した夕べの祈り、後の席に申し訳なさそうに座っている寮生に、最前列から振返って、厳かに祈りを促された。そして主の祈り。ある日、中学時代の友人から、"君の神に私の罪を告白して赦しを乞うてくれ"との長い手紙がきた。読み終えた夜、既に眠っていた彼を起こして、友人の代りに告白した。"罪を悔いることが大切。安心しなさいと伝えなさい"。そう言って、大きな手で私の手を握った。

ベランジェがカナダへ出発した。見送りのシスターの一人にキスをしたら、別のシスターもキスを要求した。"ハハ、ヤ・キ・モ・チ！"。そう言って、そのシスターにも笑いながらキスして、飛行機へ向かった。これが私がベランジェを見た最後であった。

カナダ帰国を知った先輩方から呼出された。"寮長としてベランジェの状況を報告せよ"。ホテルオークラで待合わせて、御説明申し上げた。その後、先輩方は"懐かしの上原へ行こう"とタクシーを列ねて、今は都立高校となっている修道院・寮の向いの"パン屋"さん(実は喫茶店)に集結。私もお供させて頂いた。如己等でお名前を存じ上げていただけで初対面なのに、ずっと前から面識を頂いていたかの様に、遅くまでお話をさせて頂いた。江島さんにはずっと後にもお世話になった。麦の穂学園の藤井先生と万寿江先生の慰労会の後、日帰りすると約束した妻に、"やはり一泊して。"としどろもどろの私から受話器を取上げ、"是非、沖崎君には残って貰いたい！"と妻を口説いて下さった。

78年の"パン屋さん"に戻る。大学院進学のために下宿を探さねばならなかった私は、"パン屋さん"に下宿を見つけて頂いた。ベランジェの予言は正しかった。上原からしばしば寮に行った。ある日、寮からの帰途、とうとう舌の奥が震えた。

上原でもくつろげる喫茶店を見つけた。いろんな映画を観た余韻にその店で浸った。素晴らしい研究を発表し続けているある教授とその店のマスターは小学校の同級生で、横浜での学会で、私をその教授に紹介して下さい(9年後、その教授の下で研究せよとのうれしい出向命令があり、そこでの縁で妻と結ばれた)。上原は4番目の郷里となった。

84年に就職。米国大使館の近くに本社があり、出張の度に、ホテルオークラの方をみる。2回目のボーナスでCDプレーヤーを買い、ゴスペルシンガーのマヘリア・ジャクソンが歌う"主の祈り"を聞く度に涙が出てきた。暗いお御堂での夕べの祈りを思い出していた。89年に婚約。結婚式は勤務先の地元の徳山市で挙げることになったが、寮を彼女とその家族に自慢したくて、修道院で婚約式を挙げた。幸福な家庭の実現を祈った。なかなか子供が生まれなかったが、4年目ようやく女兒が誕生。名前をまなみとしようかと考えたところ、"マナ"という言葉が聖書にあったなと思い、西村さんに電話した。"出エジプト紀

で、困窮したイスラエルの民が神から賜ったもの"とのことであった。漢字では愛実とした。

大牟田と鹿児島とからの縁は日野に集まった。そこには、焼酎好きで、悪戯っ子で、厳しくて、暖かくて、日野の寮を誇りにしていたベランジェがいた。そこから、そしてベランジェから、また新たな人の縁が広がった。光が焦点に集り、また広がって行く様に。

誰かに似ていませんか？ 2000年ほど前に、三人の学者や羊飼が導かれてきたところに生まれて、沢山の人と関わって生きて、命を落とし、でも、今も多くの人の心の中に生き続けている誰かに。

今、私は、"匂のしない焼酎は焼酎ではない！"と力説しています。匂のする焼酎を嫌う周囲の連中に私は言っています。"エー？、おいしいヨォ、なんで飲めないカ？"。

19期 齋藤 泰晴

今はあまり使われていないかも知れませんが、「公教要理」と書かれた小さな本がありました。カトリック信者になる前には、教会の教えのエッセンスが記された公教要理を勉強しますが、わたしが、高校生の頃は、この古ぼけた本を使っていました。高校生の頃、聖書を読むようになって、イエスキリストの生き様にひかれるものを感じ、教会に通うようになったのですが、いざ、公教要理を勉強してみると、わたしの気持ちは教会から離れてしまうのが常でした。「教皇無謬説」「天国・地獄・煉獄」など、教条的に書かれた言葉を読むたびに、信じられないと感じていました。

東京の大学に進学することが決まったとき、カトリック系の学生寮があることを、教会の住所録で知りました。日野に行き、ブラザー・ベランジェにはじめて会ったとき、彼は、満面に笑みをたたえて、陽気に迎えてくださいました。そして、寮生たちの面接を受けたとき、4年間をこの寮で過ごすことになんのためらいも感じませんでした。この4年間に、わたしは、これまでの人生の中でも最もすばらしい、さまざまな出会いを経験しました。

ブラザー・ベランジェは、宣教師として、東洋にわたった人でした。しかし、わたしは、あまり言葉によって、宣教をされた覚えはありません。わたしにとってのベランジェさんは、宣教師ではなく、タオル地のふんどしを身にまとい、ドンブリ飯や、日本人以外口にできないはずの軟体動物「ほや」を食べ、焼酎のお湯割りを作ってくれ、変な日本語を駆使して場をにぎわせ、いつも陽気で、すべてを包み込む優しさをもった人でした。

彼は、宣教のために、私たちの年齢よりもずっと若い時に、家族を離れ、戦争の気配漂う異国の地にわたり、強制収容までされた人でしたが、その心意気と強靭な精神は、ほとんど私たちの前には隠されていました。癌に侵され、血尿と激しい痛みがおそった深夜、寮の庭を走っていた時には、強靭な精神を垣間みたように思いましたが。

ベランジェさんが私たちに見せた姿は、彼が備えている属性のうち、自らが、そのほとんどを捨てて、最後に残った姿だけだったように思います。彼が最も大切にしていた生き方でした。この姿はいろいろなところでわたしの記憶に残ります。これをなんと呼べばよいのでしょうか。ベランジェさんの言う「キリストの光」ですか？

彼が亡くなってから、約20年を経て、元寮生たちが思い出を書いています。なにかに似ています。そう、聖書です。イエスキリストも自ら教典を書きませんでした。彼は、ただ、最も大切なこと以外を捨てたために処刑された人でした。イエスの生き様をみた弟子たちが、書かずにいられなかったものが聖書になりました。

ベランジェさんの放った光は、ほのおからほのおへと受け継がれて行くはずです。ベランジェさんのおかげで、とうとうわたしも洗礼を受けてしまいました。今も、昔と変わらぬダメ信者ですが、ベランジェさんの生き方には疑うものはなかったものですから。

ベラの思い出

19期 藤井 徳久

そろそろくるかな・・・

そらきた。

彼は「お願い」や「頼む」という日本語は覚えていないらしい。

人の名前を呼べば、彼の場合はすべてらしい。

でかくて、白く、そして少したるんでいる。

手の往復運動が、熱エネルギーに変換され皮膚が瞬く間に赤く変わる。

背中全体が程よく赤くなるとそろそろ終了の目安。

最後の仕上げは、赤くなったところに・・・

”バチーン”

手形を押印し、三助の終了。

「ありがとう」この日本語は覚えていた。

19期 茂 牧人

私は、1976年から80年までラ・サール寮にお世話になりましたので、ベランジェの最後の頃を知っています。しかしその記憶もかなりうすれてきていて、あまり確かなものではないかもしれません。ここに記すのは、その中で特に私に印象深かったことの断片だけとなります。

私の記憶に特に深く残っているのは、ベランジェが病に倒れる前後のことです。彼は、体に痛みがあるのに気づいて、寮の庭（そのころは、まだ研修センターはなかった）を全速力で3周ほど走ったということです。私は、その事実には圧倒された覚えがあります。

それから、しばらくして復活祭の季節になりました。（この事実は、もしかしたらもっと前のことかもしれない）そして、ベランジェと何人かの友人とともに、豊田にある教会まで歩いて行って、ミサを受けました。そのミサは、歌ミサでとても美しいミサだったように覚えています。もしかしたら、それは聖金曜日のミサだったかもしれません。そのミサは、とても印象に残っています。

個人的なことを書くと、私は、寮に入って1年生のときにプロテスタントの教会で洗礼を受けました。というのも、私の親がプロテスタント教会の牧師だったからです。しかし、大学もカトリックの大学だったし、その哲学科で哲学を勉強していたこともあって、私の中にプロテスタントとカトリックの信仰を媒介していきたいという願いが生じたのもこのころだったように思えます。私は寮で、あまり盛んではなかったのですが、夕方7時にゆうべの祈りの会が修道院で開かれ、ときどきベランジェといっしょに祈りを捧げていたことを思い起こします。それが随分自分の信仰にとって役にたったとおもっています。

その他入院中2回ほど見舞いにいったときのことや、最後に羽田空港まで見送りにいったことなどを思い起こします。ベランジェは、私たち寮生にとってとてもあたたかい舎監ただけでなく、修道士の姿を私たちにみせてくれた人でもありました。ほんとにありがとうといいたい人でありました。

19期 古橋 英敏

19期の古橋です。

貴職何かと大変ご多忙と拝察される中、ベランジェ記の翻訳の労をお取り頂いたのみならず、その後一連の大変行き届いたフォローを賜り、ただただ頭を垂れるばかりで本当に感謝の言葉も見つかりません。

雑事に追われ未だ投稿叶わず大変忸怩たる思いを致しておりますが、一連の貴トライアルに対する小意は同期の杉原君が先のメールにて的確に代弁してくれておりますので、同君の言葉を借りることでお許し頂きたく存じます。

無論、ご提案の資金調達方法については異論なぞ全くあろうはずがございません。宜しく願い申し上げます。（何なら、20年振りに皆んなで三多摩でリヤカー引っ張ってバザーやりましょうか？ 八八八）

百有余人に及ぶラサー寮OB諸先輩の、連綿と続くベランジェとの熱い交わりの歴史の中で、ベランジェ晩年の最後の数年間を寮生として間近に接する巡り合わせに恵まれた我々世代は、これはどうしても、ベランジェに対してもフィリップ先生に対しても諸先輩に対しても、寄稿せねばならない責務がある・・・と当初から意気込みだけはカッコよく持っていたのですが、大上段に振りかぶった手前、大変重くなってしまった筆がなかなか取れずぐずぐずしているうちに、同期の齋藤君が大変立派な文章をしたためてくれ、また前後して他の諸先輩・同期・後輩諸氏の真心こもる文章が次々と報じられて、気持ちばかりあせる一方ますます筆が重くなってしまいました。恐らく、そういう気持ちの面でも現実的な時間の面でも、もう書くことはできないと思います。お許し下さい。ベランジェごめん！

全く勝手に言いますが、もしもお許し頂けますならば、こんな言い訳の駄文（の一部）でも、皆さまの熱い文章の末尾で誌面を汚させて頂き、愚生とベランジェとの交わりの痕跡を皆さま同様留めさせて頂ければ、そしてベランジェに対する愚生の免罪符とさせて頂ければ大変大変幸せです。お願いします！

また、何もせずお願いと注文ばかりでこれまた大変申し訳ないのですが、「ベランジェ記」をご編集頂くに当たっては、「ベランジェ年表」みたいなものと「ベランジェマップ」みたいなものがあれば有難いなと思っております。

貴職にご翻訳頂いた「ベランジェ記」を拝読させて頂いて、愚生が知己を得るに先立つベランジェの激動の人生を初めて知り、改めて背筋を直しベランジェの遺影に向かう思いを持ったのですが、そのような重い人生の足跡を正確に想像し理解すべく回を重ねて読む中、「年に に行き した」とのくだりでは都度ベランジェの年齢を暗算し、忘れかけた日本史と世界史の知識から当時の世情を想起し、どの辺なのか見当もつかないカナダの町の風景を思いを馳せ、そしてまだ髪の毛が濃かったであろうベランジェの風貌を想像して理解に努めておりました。そのような伝記理解のツールとして、「年表」と「地図」（特に後者！ - - カナダの地理は全くわかりませんので・・・）を付けて頂けると大変嬉しく思います。

以上、投稿もせずお手伝いも出来ず、大先輩に汗かかせるばかりの一方勝手なことばかりお願いし、本当に申し訳なく思っておりますが、何卒宜しく願い申し上げます。

21期 岡田 総太郎

4年間のラサー寮生活は私の人生の中で、その前後の日々に比べて大変比重が重いというか貴重な体験をさせて頂いたという点で、今も鮮明に、また、懐かしく思い出されます。その中での重要な登場人物は言うまでもなくベランジェ先生、フィリップ先生、ラベル先生です。

ベランジェ先生は私が2年生の時にカナダに帰国され（寮生で羽田空港まで見送りにいきました。見送りのゲート近くで空輸の為の檻に入れられている犬を見て、犬も外国旅行をする時代になったかと、ベランジェ先生を見送る重苦しい雰囲気の中、皆で笑った事が昨日のように思い出されます）、戻らぬ人となりました。追悼ミサでは、ふだんおっかないと思っていたOBを含めた諸先輩が男泣きされていたのが思い出されます。

ベランジェ先生の思い出の一つは、確か寮祭がバザーの打ち上げの時に寮の自室で女性（今は私の妻となっております）を含めて数名でお茶等飲んでおりましたら、寮の自室は女人禁制であると大変厳しい表情でお叱りを受けた事です。後にも先にも、お叱りを受けたのはこれ一回で、ベランジェ先生の偲ばれる後のイメージはあの大きな手と柔和な笑顔です。

また、月一度催された誕生会で美味しそうに東北名産の瓶詰めの“ほや”を食べておられて、私も試食にあやかりましたが（とても臭くて）食べられなかった事を強烈に覚えております。（後年、仙台で生のほやを食べた特に初めてその美味しさを認識し、今でも、ほやを見るたびに、ベランジェ先生を思い出す次第です）。

目下、私は原子力発電プロジェクトの輸出営業を担当しており、近年、カナダ原子力公社と仕事をしている関係でカナダ/トロント地区によく出張を致します。ベランジェ先生のお墓は、トロントから飛行機で1時間位の所にあるモンリオールとお聞きし、実際の連絡先をラベル先生から教えて頂いております。日本酒と“ほや”をもって、お墓参りに行くチャンスをねらっております。ベランジェ先生、待って下さい。

21期 明珍 美樹生

午後7時、夕べのお祈りのベルが鳴る。僕は慌てて部屋の電気を消し、入口から見えないベッドの隅で身を固くする。ピタピタピタ、来た来た来た、ベランジェは早足だ。ゴンゴンとベランジェがノックする。僕が息を止める瞬間だ。次の瞬間、もうベランジェにえり首をつかまれ、部屋の外に連れ出される。

「わかった、ベランジェ、お祈りに出るよ」。

こんなことが毎日繰り返された。最初から素直にお祈りに出てもよかった。でも、こんなふうにはベランジェにかまってほしかったのだ。

ベランジェが亡くなったのは、大学が長期の休みに入っていたときだった。葬儀の直前、僕は田舎に帰った。だから葬儀に出なかった。OB名簿の作成がなにかに追われ、やっと目処がたったときだった。ベランジェの葬儀に出ると田舎に帰る機会を逸してしまうような気がしたのだと思う。非人情なことをしたとずっと後悔してきた。田舎から寮に戻ると、葬儀に出た寮生はベランジェの写真をもらい、机の上に置いていた。僕にはあのベランジェの写真がない。ベランジェに最後に不義理をしたという思いが、20年が経とうとしているのに、今なお、心の中でうずいている。

21期 梅田 恭正

ベランジェさんの思い出の執筆依頼がきた。

まあ、OBはたくさんいるから、私一人ぐらい書かなくても、いいだろう。

もともと、作文なんて苦手だし……

そんな感じで知らんぷりしてた。

でも気持ちのどこかに何か引っかけながら過ごしてきた。

ふと、書いてみようかなと思った。

思い出？ 何があったっけ？ 思い出そうとする。思い出せない。

というより、いろいろなことがごちゃごちゃになって浮かんで来て、まとまらない。

まあ、一人ぐらい、いいか。また、あきらめる。

そのうち、何人かの原稿が電子メールで届く。

受信した原稿を読むたびに、ああそんなこともあったな。
昨日のことにように思い出される。
もう、仕事はそっちのけで、寮生時代に戻ってしまう。
いろんなことがよみがえってくる。
毛むくじゃらの太い腕。
ちょっと伸びた髭の痛い顔。
入寮したときに、迎えてくれた暖かい笑顔。
夕べの祈り？ だんだんと出なくなってしまったっけ。
寮には帰ってきているのに・・・
でも、たまに出ると、すぐ終わってしまったのはなぜ？
あまりうまくない聖歌が懐かしいのは、なぜ？
誰かの原稿にあった、ベランジェさんの告別式の写真。
そうだ。どこにしまったっけ？
絶対になくしてはならないと、
確かに、しまったはずのモノクロのベランジェ。
探しては見たものの、見つからない。
でも、絶対家の中にある。
絶対捨てていない、絶対捨てられない、大事なもの。
きっと、何かきっかけで思い出される彼の思い出と同じで、
突然懐かしい顔がどこかから出てくるのだろう。
空気みたいにありがたみに気づかず、でも無いと困る。
誰かの一言で、すぐ思い出されるような、
私にとってベランジェさんってそんな存在。

21期 平井 憲男

なにせ、新潟の田舎で育ったものだから、外人（失礼）さんにお目にかかるのも初めてで、ベランジェと話をするときにはなにかしら緊張していた。いつもにこにこしていて、ひげが痛かった印象がある。全寮生がああ「洗礼」を受けたのか？学生時代はまじめだったので、ベランジェに迷惑をかけたことなど無かった・・・と書こうと思いながら、日野警察署に迎えにきてもらったことを思い出した。

サツマシラナミとホヤが好きだった。オレは今でも飲めず、食べられない。ヘンなヒトと思った。今でもそう思っている。寮と共にある人だった。20年間続いた、その間、百数十人の寮生が通り過ぎていき、そして同じ瞬間を連綿と伝えてきた客と。仙台ホームや、函館ラサールの、同じ時間をすごした人達もそんなふうにいるのだろう。振り返る日とみんなにそう感じさせる人だった。厳しい所もあったけど、優しい人だった。どうしてあんなに人間（ヒト）を好きになれるのだろう。大切なことを見せていただいた、そんな気がします。

ありがとうベランジェ。

21期 森山 勉

第二外国語で仏語を専攻したのですが、最初の授業で"W"の発音がどうしてもできず、寮で早速ベランジェに発音を教えて貰ったのが、最初の思い出です。ベランジェは、何度も丁寧に教えてくれるのに、習う側のセンスがないために合格点を貰えず、とうとう例の痛い「ほおずり」（確かヒゲ地獄といって、みんなから恐れられていました）を受けるはめになってしまいました。

麦の穂学園（当時、藤井学園）の喜多先生に教えて貰ったと記憶していますが、ベランジェは焼酎が好きでしかも鹿児島芋焼酎が大好きであり、寮では行事以外は禁酒だけれども、風邪をひいたといえ

監室で呑まして貰えるとのこと。私も鹿児島出身のため芋焼酎は大好きです。よく風邪を引き（もちろん呑みたいための口実ですが）、ベランジェにお世話になりました。いつも待っていたと言わんばかりの歓迎ぶりで、満面の笑みでした。電気ポットに湯をわかして芋焼酎と一緒に呑みましたが、本当においしかったなあ。その時よくアルバムを見せて貰いました。家族の写真や仙台のホームにいた時の写真等々。そのなかに井上ひさし氏の小さいときの写真もありました。ひょっとしてベランジェがモッキンポット氏ではないのだろうかと思ったりもしました（本当のところはどうなのでしょうね）。

ベランジェはお風呂がとても好きで寮のお風呂によく入っていました。カナダに帰るちょっとまえのことだったと思いますが、膀胱の病気をされて身体に人工の膀胱を付けているにもかかわらず、「一緒にお風呂に入ろう。背中を流して欲しい」と誘われました。ベランジェの背中を流しながら、思わず涙が出そうになりました。

羽田空港まで見送りに行きました。ばんざいをして見送りました。後ろ姿が寂しそうでした。ベランジェさん、わずか2年間でしたけれど本当にありがとうございました。

22期 野片 義也

私は1979年にラサール学生寮に入寮しました。本当は78年に入寮を許されていたのですが、志望の大学に落ちてしまい、翌年あの入寮面接を再び受ける破目に陥ったのです。大学もそうですが、学生寮も執念で入ったようなものです。今から考えるとどちらが第一志望だったのやら、つまり大学なのかラサール学生寮だったのか、その後の学生生活を思い起こすと、私を知る人間はおそらく誰もが太鼓判を押してくれると思います。すなわちラサール学生寮が第一志望だったんだよと。それほど人目惚れ？した理由は何だったのか。おそらくベランジェさんと寮生たちが作り上げた寮の雰囲気だったのではないかと、そんな感じがします。（その頃はジュールさんではなくベランジェさんと呼んでました。）その後閉寮までの3年間で10年にも思えるほどの思い出が目一杯詰まった寮生活となりました。ベランジェさんとは一年にも満たないお付き合いだったというのがなんと不思議です。

一年目は玄関に一番近い部屋、つまり舎監室の前で暮らしてました。朝には寮生が出かけるのを見送り（ベッドの上ですが）、夕には寮生の帰りを迎えるのが常でした。夕食は大抵一番手。寮名主と言われるほど寮に居着いた私でしたがベランジェさんは何も言われませんでした。ただ時間の過ぎるのはとても速いと言われたことがありました。最初はゆっくり歩いていたのがジテンシャからジドウシャになりやがてシンカンセン・ヒコーキ、今ではロケットですよと。カナダに帰る前にも同じことを寮生たちに言っていたのがとても印象に残っています。それから日本酒がいいですよと言われたことも。

「モッキンポット氏の後始末」を読んでいたら、古いアルバムを見せてくださったことがありました。「これひさし君です。ひさし君。」と写真を指して色々な話しをされました。何を話してもらったのか全く覚えていないのがなんと残念でなりません。それとモッキンポット氏ってベランジェさんですかと聞いたのが聞けなかったのか、私の中のベランジェさんはニコニコと笑われているばかりです。

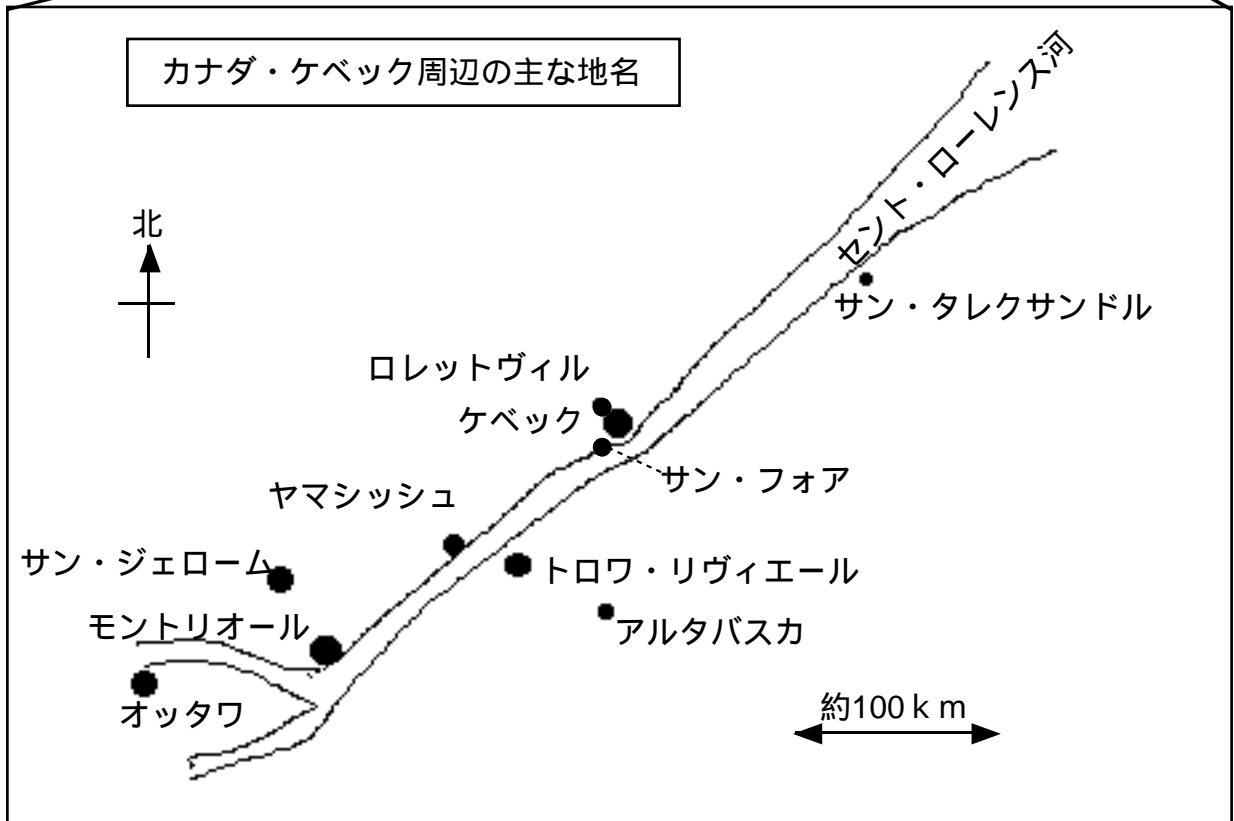
訃報を聞いた時には覚悟していたけれど心にポツカリ穴があきました。でも今では私の心の中にベランジェさんがおられます。いつもではないけど思い出せばベランジェさんはやって来て、私を暖かくしてくれます。多分私だけでなくベランジェさんを知る誰もが同じなのではないでしょうか。だから私たちが生きている限り、ベランジェさんはいっしょに生きておられるのだと思います。永遠の命とはこういうことかなと思ったりもします。でもちょっと後ろめたい気がする時もあります。自分はベランジェさんのように精一杯生きているのだろうか。時間の話は無為に時に流されている私を諷められていたんですよね。時々反省してはいても懲りない私ですが、ベランジェさんの思い出は一生の宝物です。これからもよろしく、ベランジェさん！



「ダーメーヨ」（松本修一 画）

ブラザー・ジュール・ベランジェの略歴

- 1913年6月10日 サン・タレクサンドルにおいて17人兄弟の14番目の子供として出生
- 1927年8月22日 (14歳) サン・フォア小修練院に入る
- 1929年8月29日 (16歳) 初めてブラザーの修道服を着る
- 1930年8月15日 (17歳) 初めての誓願 修学院へ進学
- 1932年1月18日 (18歳) ヤマシッシュに赴任
- 1933年4月12日 (19歳) トロワ・リヴィエール・アカデミーに転勤
- 1934年1月15日 (20歳) ヤマシッシュに赴任
- 1936年8月15日 (23歳) ロレットヴィルに赴任
- 1938年7月14日 (25歳) ケベックで終生誓願をたてる
- 1939年7月 (26歳) 願い出て宣教の道を選ぶ
- 1940年9月末 (27歳) ヴァンクーヴァーで氷川丸に乗船
- 1940年10月19日 (27歳) 横浜港に到着、韓国、中国を経て満州の瀋陽に到着
修道院において日本語を学習、小神学校で教鞭を執る
- (1941年12月8日 真珠湾攻撃)
- 1941年12月11日 (28歳) 香港上海銀行の建物に連行される
- 1941年12月21日 (28歳) ムクデン・クラブ(瀋陽のYMCA)に移動させられる
- 1942年1月末 (28歳) 四平(スーピン、Szepingkai)の神学校に強制収容させられる
- 1942年9月末 (29歳) 横浜ブンド・ホテル、帰国が不可能となり、競馬場に移動させられる
- 1943年5月末 (29歳) 山北村の強制収容所に移動させられる
- 1945年8月15日 (32歳) 日本の無条件降伏、数週間後、カナダに帰国
- 1945年11月 (32歳) ケベック市
- 1946年9月 (33歳) アルタバスカ
- 1947年夏 (34歳) サン・ジェローム
- 1947年9月 (34歳) トロント市
- 1948年1月 (34歳) オッタワ・アカデミーの年少修練院で教鞭を執る
- 1948年6月 (35歳) 再び日本に戻り、児童養護施設ラ・サール・ホームの設立に着手
- 1950年 (37歳) 児童養護施設ラ・サール・ホーム園長に着任
- 1953年9月 (40歳) ローマに向かい、第二の修練を9ヶ月間受ける
- 1955年4月 (41歳) 仙台に戻り、児童養護施設の園長と修道院長を兼務
- 1962年1月 (48歳) カナダでの休暇を利用してコンプトンにおいて百日間の黙想
- 1962年7月 (49歳) 日本に戻り、東京学生寮の舎監に就任
- 1962年8月 (49歳) 修道院長兼務
- 1966年11月 (53歳) 函館ラ・サール高校寮舎監に就任
- 1970年9月10日 (57歳) 鹿兒島ラ・サール高校寮舎監に就任
- 1973年1月 (59歳) 東京学生寮舎監に就任
- 1978年春 (64歳) 東京の聖母病院に1ヵ月検査入院
- 1978年8月 (65歳) カナダに帰国、入院
- 1978年秋 (65歳) 左の腎臓と膀胱を切除
- 1979年3月 (65歳) 日本に戻り、東京学生寮舎監に復職
- 1979年12月 (66歳) 二度目の入院、化学療法を受ける
- 1979年12月17日 (66歳) 退院
- 1980年1月12日 (66歳) 日野において最後の聖体祭儀
- 1980年1月13日 (66歳) 日野において学生寮の寮生とOBとのお別れ会
- 1980年1月15日 (66歳) 羽田空港からカナダへ帰国
- 1980年3月20日 (66歳) 帰天



ブラザー・サルト・ベランジェ、E.C. (ブラザー・マディール・ジュール) の伝記

1913年6月10日---1980年3月20日

ブラザー・フィリップ・ラポワント 編著
嶋田道也 (14期) 訳

ブラザー・サルト・ベランジェが、数年もの間彼を苦しめた病魔と果敢に戦った後、私たちのもとから旅立ってからもうすぐ二十年になろうとしています。彼が帰天してから一年後、私はこの短い伝記を刊行して同僚のブラザー達やご親戚の方々に配布いたしました。

東京の学生寮のOB達も彼の思い出を大切にしています。学生寮のOB有志が1998年5月30日に日野でOB会を開催しました。そのときにブラザー・ジュールという修道名でも知られていたブラザー・サルトの思い出話がたくさん出ました。OBの一人である嶋田道也さんに、私が1981年に出版したこの伝記のことを話しましたところ、彼からぜひ一部分けて欲しいとの申し出がありました。そして彼は伝記を読み終わった後、これを日本語に翻訳したいと申し出て下さいました。私の方でも、喜んでできるだけのお手伝いをいたしました。

手記や証言を収集することにより、中国と日本における彼の宗教と宣教の道程を辿り、彼の個性を浮き彫りにすることができました。寄せられた手記を引用した部分は「」で示してありますが、手記を寄せて下さった方の名前は記載してありません。

(訳注：【 】で示したのは、訳注です。)

出生と家族

サン・タレクサンドル駅【p.26の地図参照】から、さほど遠くない線路沿いに、「ベランジェ農園」という大きな看板がある。ベランジェ農園はセント・ローレンス河の川下にある大農園の一つであり、そこではブラザー・ジュールの父親と息子達が乳製品を商っていた。サルトはそこで1913年6月10日に、ジュール・ベランジェとエルミール・フランクールの間に生まれた。彼は17人子供がいる大家族の14番目の子供であった。サルトが亡くなった時、まだ10人ほどの兄弟姉妹が生存していた。

彼は平穏な子供時代を過ごした。家族のなかでは小さいほうに属し、農園の仕事にはほとんど興味がなかった。家族からはとても可愛がられていた。両親は彼が中等学校に進学することを希望したが、そうすると勉学の期間が長くなるので彼は進学を敬遠した。生涯を通じて、むしろ彼は人々と交わることと、すぐに役立つことに興味を持った。

サルトは、私欲を捨てて生涯を奉仕に捧げることを、おそらくかなり若いころから考えていたのだろう。植物と自然への愛、臨機応変のセンス、人々と交わりながら、また色々な困難に直面しながら多くのことを学ぶ姿勢、こうした個性を、彼は生涯を通じて育んでいくのである。

召命

サルトの家は、惜しむことなしに何人もの修道士、修道女を出した。兄弟ではサルトの他に、ケベックのドミニコ会の修道院長ジル、グランビエのトリニティ会に奥さんの死後入会したジョルジュ、ケベックのカリタス修道女会のリディア、モンリオールのプロヴィダンス会の修道女となったブランシュとテレーズがおり、さらに2人の甥もドミニコ会員である。

サン・タレクサンドルの助任司祭でもあったモリセット大修道院長は、キリスト教学校修士会(ラ・サール会)に行くことを若者達に薦めていた。サルトもそのなかの一人であった。

1927年8月22日【14歳】にサルトはサン・フォア【p.26の地図参照】の小修練院に入る。そこは少年時代とは全く異なる世界であった。その頃の養成機関は形式主義と厳格主義で凝り固まっていたが、サルトは幸せそうであった。もともと陽気な性格で、すべてを受け入れ、少しのものにも満足することを知っていたからである。先生達のなかには、ブラザー・オディロがいた。かれは後年サルトとともに中国と日本に宣教に赴くことになる。

1929年8月29日【16歳】、サルトは初めてブラザーの修道服を着、修道名は父親の名前にちなんでブラザー・マディール・ジュールと名乗った。翌年の8月15日に最初の誓願を立てて修学院へと進んだ。これからの数年間、彼は純真で真に敬虔な心と堅固な信仰心とを育んだに違いない。この信仰心によって彼は後に幾多の運命の嵐に立ち向かうのである。彼は気弱な同僚を元気づけることも覚えた。それは彼がすでに宣教者のような偉大な心を持ち、隣人へ心を向けていることの現われであった。当時修道士達の間では、長期間勉学に勤しむことはまだ余り行われていなかった。修学院で1年半学んだ後、彼は1932年1月18日【18歳】ヤマシッシュ【p.26の地図参照】へと赴任した。

修道会における最初の数年

1932年【18歳】から1940年10月【27歳】に満州に出発するまでブラザー・サルトは4回も転勤した。ヤマシッシュに赴任してから1年ちょっとしか経たない1933年4月12日にはもうトロワ・リヴィエール・アカデミー【p.26の地図参照】に転勤になった。この転勤については、彼も長い間納得がいかなかった。7年後中国にいたサルトは、管区長に宛てた手紙にこう書いている。

「トロワ・リヴィエールで管区長様にお目にかかれたのは幸運でした。それ以来、管区長様は私にとって、私を理解して下さる父のような存在になりました。ヤマシッシュからトロワ・リヴィエールへどうして私が転勤するようになったのか、時々不思議に思います。それは、たぶん神様のありがたい思し召しだったのでしょう。この修業時代に起きたことがどんなに私のためになったことか。それになにより神様は管区長様というすばらしい方と出会わせて下さった。神様には本当に感謝しています。」(1940年11月8日奉天にて)

サルトはトロワ・リヴィエールにもそれほど長くは滞在しなかった。1934年1月15日【20歳】、彼は再びヤマシッシュに戻る。1936年8月15日【23歳】、彼はロレットヴィル【p.26の地図参照】へと赴きそこで宣教に旅立つまで滞在する。

どうしてこんなに何度も、しかもしばしば学年の途中で転任があったのだろうか。その土地の事情なのか、あるいは他の理由なのか、誰も知る人はいない。しかし、次の証言にあるように、彼はどこでも大歓迎を受けた。彼は誰とでもすぐ打ち解けた。取り越し苦労をしなかったのは、彼の目には彼を導く神の手がいつも見えていたからなのだ。1938年7月14日【25歳】ケベックで彼は終生誓願をたてる。

この最初の数年間、修友、修道者及び教師としての彼は、同僚のブラザーの目にどう映っていたのだろうか。当時のブラザー・サルトを知る同僚のブラザーはこう証言する。

「彼は愉快で、楽天的で、(すこし控えたほうがいいんじゃないかと思うぐらい)人をよくからかったりする人で、でも同僚のブラザーを大事にしていました。チェスが好きでね。それと彼がいるとみんなが素直な気持ちになるんですよ。人のために上司を助けたりもする。誰とでも仲良くなれる。愛想がいいし、ユーモアのセンスもありました。とても活動的でした。純真な信仰を持った忠実な修道者でした。細かいことには向いていませんでしたけれど。修道会や同僚のブラザー達に愛着を持っていました。とても世話好きで、どんなものでも修理していました。ちょっとお節介が過ぎることがたまにあったけど、気にするほどのことじゃなかったです。修道会では、彼はひときわ目立っていましたね。先生としては有能だし一生懸命。

子供から好かれていましたし、子供とも家族とも親しくしていました。子供達のグループ、それに色々な慈善運動のために飽きることなく熱心に忙しく働いていました。同僚のブラザー達にも、それからブラザーでない先生達にも協力的でした。自分でも熱心に働きましたが、人を働かせるのが上手でした。一言でいうと気難しい人ではありませんでした。(それほど気難しくないと表現する人もいます)。それで厄介な状況の中でも冷静なんです。そして決して悲観しない。精力的で人を元気にする。どんな状況でもすぐ適応する。愚痴を言わない。自らのことを語らない。率直で、機転が利くし。宣教者の心を持っている。しかし余り細かい人とは合わなかったかも知れません。」

こういった個性を彼は生涯持ち続けた。みんな良く知っているとおり、彼はとてもおしゃべりだ。彼は話しながら笑うのが好きだったが、声がちょっと大きすぎた。時々余りにもやかまし過ぎることもあった。そう、同僚のブラザー達で静けさを好む人の中には、「うるさい、困った人だったこともあったかもしれないけれど、優しい心の持ち主だった！」と言う人もあった。

何物にも挫けないように見えた彼でも、自分のことを理解してもらえずに人知れず苦しんだことが無いわけでは無かった。前に引用した満州からの手紙を読むと、そうした苦しみが伝わってくるようだ。

同僚のブラザーのなかには、「彼は修道会のすべての人の友人だった」と指摘する人もいる。強い権威でもって人と接する人ではなかった。「教室でも教会でも、かっとなることはあっても、またすぐ笑って元どおりになるんです。」

ヤマシッシュの滞在は短かったが、土地にも人々にも愛着を持っていた。生徒達も彼への愛着をずっと持ち続けた。彼は人の顔と名前をととても良く覚えていた。50年後、カナダに戻った後も彼はヤマシッシュの生徒達の名前をまだ記憶していた。

ロレットヴィルにおける、彼の最後の上司も彼への賛辞を惜しまない。

「1938年にロレットヴィルに校長として着任してブラザー・ジュールと知り合い、彼が中国へと旅立つまで一緒に仕事をしました。ブラザー・ジュールは、感情を表に出さなくても、その敬虔さは膝まづくときのゆったりとした動作、祈りを捧げる時の大きな声、ミサの侍者の献身的な準備、模範的な教会の運営として表われ、同僚のブラザー達や生徒達の目に止まりました。神のしもべとしてのミサの侍者の仕事に、彼は独自の工夫を加えました。善良なお父さん達を侍者として用いたのです。お父さん達が、レースの白衣をまとって荘厳ミサで厳粛に仕えるところを想像できますか？ブラザー・ジュールは、その機転とあらゆる試練に耐える寛容さによって、修道会、教育委員会それに司祭に認められました。ブラザー・ジュールに言わせると、そのようなことが即、喜びであり、人生であり、節度のあるいたずらなんです。彼は先生の威厳でもって生徒を威圧するというタイプではありませんでしたが、教えることに熱意を持っていましたし、授業の準備を周到に行う、とてもいい先生でした。最後に私にとって印象深かったできごとについてお話ししましょう。彼は彼の兄弟がドミニコ会の神父になる叙階式に参列したかったのですが、許してもらえなかったのです。彼はだまって耐え忍び、彼自身が忍耐強くなるためと兄弟の聖職が実り多くなるようにその犠牲を神様に捧げたのですよ。」

長い年月が経過した後でもこのような証言が寄せられたことから、彼が知人や同僚にとって、いかに印象的であったかが明らかである。

宣教という天職

1939年7月【26歳】、ブラザー・サルトは願い出て宣教の道を選んだ。それはふとした思いつきではなく、長いあいだ考えた末のことであった。彼はエペール管区長に宛てた手紙にはこう書いた。

「遠い国に宣教に行きたい、という希望を管区長様に申し上げたいと、長いあいだ考えていました。常識的には、私は宣教にはふさわしくない人間ですし、自分がまだ未熟であることは十分承知しています。でも宣教に行きたいという思いはとてつと抑え難く、しかも日に日に募ってくるのです。

自分は宣教に行くべきか否かを検討し、また私の霊的指導者や両親にも相談した後の決心です。両親と祖国、それに母国語のもとを去るのは大変辛いことです。死への旅につくようなものです。神様は、寛容な魂にこのような犠牲を求めるのです。神様には宣教師がどうしても必要なのです。自分にできることを他の人にまかせておけるでしょうか。私にできることは、私がやりたいのです。神のお導きにすべてをゆだねつつ、遠い国の布教団で働くことを申し出る人達の中に私の名も加えて下さるよう切にお願い申し上げます。どうか私のつつましい尊敬と服従の心をお受け入れくださいますよう。」(1939年7月18日、リスレにて)

一年後、彼は満州へ行く宣教師として選ばれた。彼のほかに4人のブラザー達が、満州で宣教に従事しているブラザー達に加わるようになった。4人のブラザーは、ケベック州出身のブラザー・オディオ(シャルル・パケ)とブラザー・イポリット(ポール・ルミール)、及びモントリオール出身のブラザー・メデック(ドゥヴィル)とブラザー・ギ(オーデ)であった。

家族と年老いた両親のもとを去ることは、彼にはとてつと辛かった。とくに、彼はいつでも落ち着いている母親を崇拜していた。大家族だったのでいつも何かと苦勞が絶えなかったが、サルトは、母親が取り乱すのを一度も見たことがなかった。しかし彼が外国に旅立つことを告げると、母親は悲しみにうちひしがれてしまった。

母親はサルトに、「あなたにもう会えなくなるのではないかしら、向こうでは苦しいことや辛いことが沢山あるのではないかしらと、お母さんは心配でたまらないの」と打ち明けた。「そんなふうに取り乱して、悲しんだり心配したりするのはお母さんらしくないですよ。お母さんは今までずっと苦勞ばかりだったけれど、それでも平静にいられたのに。神様はいままで、いつもお母さんの傍にいらっしゃったでしょう。宣教師としての私もきっと守ってくださいますよ。」すると母親は納得して、落ち着きを取り戻した。

この話は、1979年12月末に日本を去る数週間前に、彼と最後の祈りを捧げるために日野に集まった修道者の仲間達に彼自身が話したものである。彼はさらにこう続けた。「私も、どんなことがあっても平常心でいたい、といつも願っていましたが、神様のおかげで今までそうしてこられました。」

宣教という使命の厳しさ、それから別離という犠牲を払わないといけないという点では、兄弟のジルも同じだ、とサルトは思っていた。そのころジルはドミニコ会の司祭に叙階されたばかりであった。サルトにしてみれば、兄弟に忍耐を期待するからには、自分も同じ様な試練を受けなければ気がすまなかったのである。

宣教のはじめ

ヨーロッパに戦争の嵐が吹き荒れていた1940年の9月末頃、修道士のグループが向かったのは日本の占領下にあった満州国であった。ヴァンクーヴァーで修道士達は氷川丸という日本船に乗り込んだ。同じ船には、カナダの他の宣教師達のグループがいた。聖ヴィアートル会の司祭達、善き牧者会の聖職者達、及

び無原罪の御宿りの修道女達である。

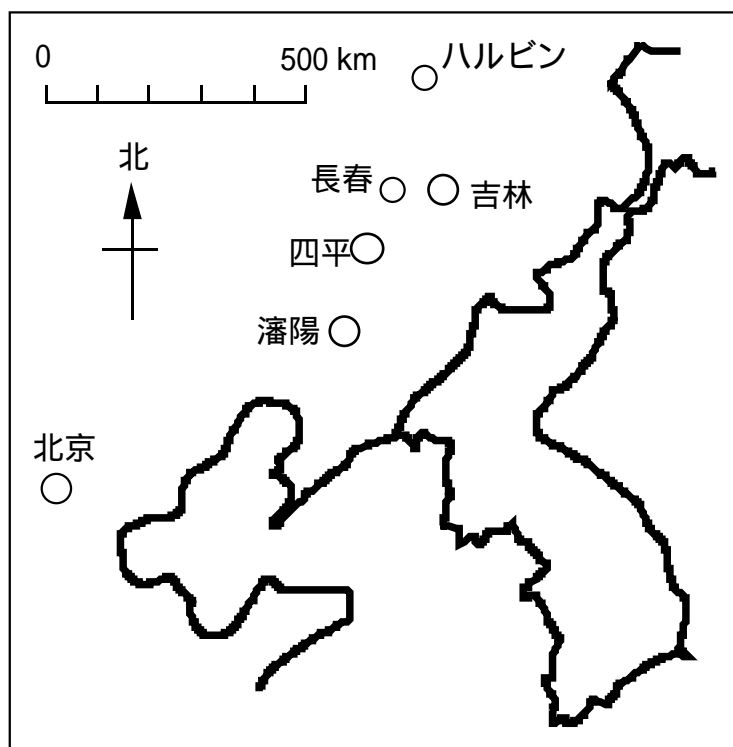
彼等の乗った船は10月19日に横浜港に到着した【27歳】。仙台のブラザー・マリー・マルセルが横浜に迎えに来ていたが、「戦争が始まりそうな時にやってきた君たちは運が悪かったね。」という彼の歓迎の第一声が彼等の感激の出鼻をいささかくじいた。実際、その言葉通り翌年の12月8日に日本は連合国に宣戦を布告したので、宣教師達が自由の身であったのは1年間だけであった。横浜港から、ブラザー・マリー・マルセルは到着した修道士達を汽車や船で日本を通り、韓国、中国、そして最後に満州の瀋陽【p.32の地図参照】まで連れていった。ブラザー・レオポルド、ブラザー・マリー・リゴリ、それにバーテレミュが数年前からそこにいて、小神学校で住み込みで教えていた。到着したばかりで勉強をする修道士達のために修道院が設立され、ブラザー・マリー・マルセルが院長になった。そこでは言葉、文化、それにまもなく始まる宣教生活について学んだ。そこは満州国ではあったが、学習したのは占領国の言葉である日本語であった。他の人と同様にサルトにとっても、新しい環境に順応し日本語を学習するのは容易ではなかった。前に述べたケベックの管区長に1940年11月8日に彼が書いた手紙にはこう記してある【27歳】。

「カナダを去るという犠牲を払うのは、とても辛いことでしたが、その一方でついに念願がなかったことで私は満足でした。その理由や私の考えについては、よくご存じの通りです。最近無性にカナダのニュースが聞きたくになりました。ニュースが着くのに時間がかかることは覚悟しております。でも到着したときに、院長がまだいなかったのには少々驚きました。ブラザー・マルセルが、総長補佐からの9月7日付けの手紙を受け取ったのは、なんと横浜に私達が到着した日の2日前のことだったのです。

みんなで書いた手紙をお読みになってもうご存じのように、こちらでは、みんなそれぞれ、なんとかやっています。学校を建てるために、建具屋、電気工事屋、塗装屋、運転士、料理人、散髪屋、看護人、香部屋係【ミサの準備をする係】など、カナダのあちこちで少しずつ嚙ったことのある、あらゆる仕事の経験を総動員する必要がありました。こんなに色々な仕事ができるのは、私をおいて他にはおりませんよ。ここは母国カナダではないんだなあと、しみじみ思うことが時々あります。日本人になりきることに、それが私達に今一番に求められていることです。でも日本人になりきることは容易ではありません。」

状況はめまぐるしく変化した。ブラザー達は学校を建てることも、本来の仕事に取りかかることもできなくなった。彼等は、司教の要請に応じて、小神学校で教鞭をとるようになった。勉強と準備にやっと数ヵ月とれたところで、勉強をする修道士の修道院は閉鎖になった。このグループのほとんどは吉林【p.32の地図参照】に移動して小神学校で教鞭をとった。ブラザー・サルトはそこに残って瀋陽の小神学校で教鞭をとった。

中国・満州の主な地名



戦争、強制収容

1941年12月8日は真珠湾攻撃があり、宣戦が布告された日である。この日から4日後、日本警察が修道会を襲った。外国人すべてを逮捕するというのだ。修道士達は手早く荷物をまとめさせられて香港上海銀行【瀋陽支店】の建物に連行された。これが長い強制収容の始まりであった【28歳】。

10日後彼等はムクデン・クラブという瀋陽のYMCAに移動させられた。1月末にはカトリックの修道者や宣教師は汽車で四平（スーピン、Szepingkai）【p.32の地図参照】の神学校に移動させられた。そこでブラザー達は吉林の同僚や、その他多くのカナダ人及びベルギー人の宣教師達、総数約160名に出会った。

彼等は自分達で毎日の時間割を組み、外国語講座及び宗教や文化、レクリエーションの活動などを催して、自己啓発を行ったり時間を有意義に使うことができた。塙の中でいくらかの自由が与えられていたので、不安を和らげ過酷な境遇にも堪えやすくなることができた。良い食料品を調達し、病人の世話をするために、闇市を催すような世に長けた人もいた。

時とともに条件は悪化し、病人や死人があいついだ。中国と日本のブラザー達の長上であったブラザー・マリー・リゴリは、1943年10月28日に高熱のため帰天した。しかしこのときは、ブラザー・サルト他、数人のブラザー達は四平をすでに去った後であった。

1942年の夏、捕虜交換の準備が整いつつあった。ブラザー・マルセル、ブラザー・メデリック、ブラザー・サルトとブラザー・イポリットが選ばれた。9月末、彼等は横浜に到着してブンド・ホテルに投宿した【29歳】。しかし誠に不幸なことに、彼等を輸送する予定であった船舶が出航停止となったため、すぐに帰国することはできなくなった。

そこで彼等はまた移動させられた。今度は横浜の東にある競馬場の中にある競馬騎手達の控室に押し込まれた。ブラザー・マリー・マルセルは、こういった。「そこではあらゆる人種、あらゆる宗教、あらゆる状態の人々が雑居する本当の強制収容所だ。」

そしてついに【1943年】5月末に最後の移動があった【29歳】。彼等は横浜から50kmほど山奥に入った山北村の近くに移動させられた。そこで彼等は解放されるまで、宿舎や食事の悪条件に耐えながら過ごした。そこでは栄養不足によって肉体が弱っていたにもかかわらず強制労働が行われた。それに収容者の間の緊張や監視員の冷酷さ、それに無為、不安、病気などもあいまって心身状態は最悪であった。収容所の生活を詳しく述べると余りにも長くなるのでここでは割愛する。筆者にとって興味深いのは、ブラザー・サルトがこのような長い受難の歳月をどのようにして持ちこたえたのか、という点である。

外国人宣教師として、彼と四平に収容されていた神父が当時の彼の様子をこう語ってくれた。

「収容所では、彼はいつも座を賑わしていました。誰とも仲良しで、誰にも一度も『いや』と言ったことがない人で、誰とでも一緒に働いて、社交的で、微笑みを絶やさず、いつも上機嫌でした。食事に文句を言ったりするようなことは一度もありませんでした。穏和で純真で、模範的な善意の持ち主でした。」

強制収容所の中にも、彼は修道会にいた頃と全く変わらなかった。彼の同僚のブラザーは、次のような長い証言を寄せてくれた。

「ブラザー・ジュールは私にとって兄さんでした。彼は、ラ・サール会のブラザーのあるべき姿を見せてくれました。一緒に生活した7年間、宣教活動の頃も、強制収容所にいた頃も、一度約束したことは必ず守る人でした。常に熱烈な宗教心を持ち、誰にもまねできないほど献身的で、人をからかうのが好きで、そして微笑を絶やさなかった。彼がいないと、修道院は灯が消えたようでした。そして彼が帰ってくるとみんなの表情がパッと明るくなるのです。人をからかうことがブラザー・ジュールの日々の糧と言っても良かったのではなかったのでしょうか。からかいの度が過ぎるように思えることが時々あっても、人の心を傷つけることはなかったですよ。少なくとも悪意はなかったですね。」

ブラザー・サルトは、確かにとても優しい人でした。彼は、私欲を捨てて、他の人に限りなく尽くしました。強制収容所であったことで忘れもしませんのは、一年の間に同僚のブラザー達になにか失礼なことをしたのではないかと恐れた彼が、ある聖金曜日にブラザー同士がおたがいに許しあうことを希望しました。それで私達は、心を込めてそういたしました。それはとても私達のためになりました。強制収容所の中では、どうしても神経のイライラが限界に達して、他の人を傷つけないようにするためにはよっぽど注意しないと危ない、という時期があったのです。

強制収容所のことをお話ししますと、そこでも、ブラザー・サルトは、宣教師としての能力を遺憾なく発揮しました。ある家族と親しみ深くお話しをして良い方向に指導したおかげで、その家族がカトリック生活を実践するようになったことがありました。

聖ジャン・バプティスト・ド・ラ・サールの真の弟子であったブラザー・サルトは、聖母マリアに対して深い信心を持っていました。山北の収容所にいたときでも、彼とフランススコ会のブラザーと私で、隅の静かな場所を毎日行ったり来たりしながら、ロザリオの祈りを一緒に唱えたものです。ある日曜日には、私達は晩の祈りを歌いました。彼はとても歌が好きでしたが、音程があまり正確ではありませんでした。それでも心を込めて歌っていました。過労ぎみで歌えないときは、『私に構わず歌ってください。』と彼は言ったものです。」

サルトは、四平の収容所で歌を作ったこともあるのだ。収容所の中の‘なれかし’という歌で、グブリエの曲を使っていた。【石井注：‘なれかし’はマリアが天使から救い主の母になることを告げられた時、驚きの中にも神の御旨への信頼をこめて、「あなたの御旨の通りになりますように」と答えたその言葉である。（ルカ書1の38）】詩は上出来とは言えないが、彼の当時の精神状態をよく表わしている。繰り返しのフレーズには、こうある。

「私達は神であるあなたの御旨を崇めます。
偉大な愛の持ち主、情熱的な心を持った羊飼い、
茨の冠を頂いた全能の王、
私達は私達の十字架を受け入れ、大いなる神を賛えます。」

この年月の間、彼がブラザー・エバール（管区長）に認めることができた手紙は、たった一通のみであった。この手紙は国際赤十字を通じて送られた。その手紙は、山北から出されており、1943年9月6日の日付である【30歳】。行間から、この手紙が検閲されたことが明らかである。手紙は英語で書くことが義務付けられていた。

「白十字、または赤十字によってカナダに届けられますこの手紙は、管区長様の新年のご多幸を祈る私の気持ちで満たされています。管区長様とすべての友人及び親類に私の気持を伝えたく存じます。このようなことを管区長様をお願いすることをお許してください。手紙の数量が制限されているのです。私達は今日本の田舎に住んでおりまして、健康で勉強に励んでおります。毎日、管区長様のことを祈りやミサ、及び聖体拝領の時に思い出しております。ブラザー・イポリットと私は、管区長様に尊敬と服従の気持をお伝えしたいと存じます。管区長様の幸福な部下より。ブラザー・ジュール」

山北では、サルトは、トイレの汲み取りや、夫や息子が出征している近所の家庭の世話のような、誰もが嫌がる仕事をみずから買ってでた。そのため人々はサルトを尊敬し崇拝するようになった。収容所の警備員までもが例外ではなかった。「日本人を初めて好きになったのは山北の収容所時代です。日本人も戦争のために苦しんでいることに気付いたからです。」と彼は後に語っていた。彼は戦後日本に戻って、山北の村や収容所跡を何度も訪れた。何軒かの家を尋ね、昔から知っている人達から、小さかった子供達が大人になったことを知った。30年経った後でも、人々は彼のことを覚えていた。彼が逆境のどん底においても人々を愛し、人々に尽くすことができたという事実によって、彼の行動の原動力がどのような精神であったかが理解できる。彼はこの強制収容の苦しい年月のことを時々話すことはあったが、決して皮肉や恨みを言ったりすることはなかった。

1945年8月15日、天皇が公式に日本のラジオ放送で無条件降伏を宣言した。収容所は歓喜で溢れた。ついに自由がやってきたのだ。数週間後、収容されていた人達は米軍によって解放され、連れ出された。宣教師のブラザー達は、健康と体力を回復するため、再びカナダに帰国した【32歳】。

戦後

彼は帰国してもじっとしてはいなかった。カナダ国内をあちこち旅してまわった。これは休養とも言えるかもしれない。しかしあちこちで手伝いながらの旅である。1945年の11月はケベック州のジャック・カルチエ【32歳】、1946年9月にはアルタバスカ【33歳】、1947年の夏はサン・ジェローム【34歳】、1947年の9月にはトロント州のオークランド【34歳】、そして1948年1月にはオッタワ・アカデミーの年少修練院を訪ねた【34歳】。

「その頃、私はオッタワの年少修練院の9年目の年でした。彼がどんなに喜びに輝

いていたか、今思い出しても驚きを禁じ得ません。ブラザー達が食堂で食事中にどうしてあんなに笑い転がっていたのでしょうか。それはブラザー・サルトが、昔、つらい宣教の年月に起こった、おかしなできごとのあれこれを皆に話して聞かせていたのです。

彼のことはとても印象に深く残っています。もしかすると、彼は、無意識のうち私に宣教師になる考えを植え付けたのでしょうか。

彼とは後に日本で再会し、日野で数年間を一緒に過ごしました。寮生や小教区の人達、それに近所の人達への、彼の宣教師としての影響力、癌との長い闘病、2回の大手術からの回復中に見せた闘志、精神力。化学療法中、病院に私が毎日見舞に行ったときに彼が見せてくれた、平常心で運命を受容する姿勢。これらすべてを私はこの目で見てきました。そして1980年1月15日に、彼がいよいよ最後にカナダへ旅立つとき、空港まで私は見送りにいきました。彼の最後の微笑み、そして最後の握手を、私は終生忘れることはできません。」

再び日本へ

1948年の6月【35歳】には、ブラザー・サルトは十分に体調が戻り、日本に戻ることに念頭になかった。彼は2人の新しい仲間、ブラザー・マイケル（ルネ・ジャルベール）と、ブラザー・フェルディナン（アンドレ・ジャンドロ）と一緒に旅立った。3人とも仙台へ行き、戦後の最初の仕事として、児童養護施設ラ・サール・ホームの設立に執りかかった。

「日本に初めて行ったとき、一緒だったのがブラザー・ジュールでした。熱情溢れる彼を見て、私達二人は、これからまったく新しい冒険が始まるのだと確信したのです。仙台に着いてからは、彼は様々な試みを次々と率先して行いました。この頃は施設を設立する時期でしたので、色々な仕事が次から次へと生じていました。」

その頃の日本は、終戦直後で困窮の極みにあった。日本の復興はようやく始まったばかりで、食料品と生活物資はほとんど無きに等しかった。1948年9月、ラ・サール・ホームに最初の子供達が入園してきた。まだ最初の建物が建築中だったので、ブラザー達と子供達はとりあえず作業場に寝泊りした。

彼は、釘など日本では入手できない物資をカナダから取り寄せ、敷地内の木を切り倒して建築用の木材に使った。ブラザー達は熱心に働き、困難を切り抜けた。この時期に日本に戻ってきた宣教師達はみな同じ様な体験をした。サルトは仕事に全身全霊を打ち込んだ。苦労も多かったが、喜びで一杯であった。

1950年【37歳】に彼は児童養護施設の園長に任命された。当時の園児の一人である井上ひさしは、今日、日本でもっとも有名なカトリック作家の一人である。作家としてデビューした頃の作品のなかで、彼はラ・サール・ホームの時代をユーモアたっぷりに描いている。ブラザーの面々は偽名で作品に登場しているが、どれがだれだか、すぐに見当がつく。彼はブラザー・サルトをおおいに尊敬していた。当時の同僚のブラザーはこう語る。

「仙台の司教が私たちに委ねた養護施設の仕事について、最近修道院で話しながら、私はブラザー・サルトを再び思い出しました。彼の語り口は純朴で飾り気がありませんでしたが、彼の言葉は本心からのもので確信に溢れており、私達の心に響きました。彼は必要に迫られて何か指摘するようなときは、誰も傷つかないように気配りを怠らなかったので、抵抗無く受け入れられました。

彼は自分を園児達の父親とっていました。私達は自分達を園児達の大きいお兄

さんと思っていました。私達の一番大事なことは園児達を心から愛し、惜しみなく彼等の生活に不足しているものを施し、ひたすら献身的に尽くすことでした。

彼自身は園児達に親切で父親の役割を果たしていました。児童が悪いことをして捕まると、ブラザー・サルトは、その過ちについてだけ諭し、すでに済んだことをまた持ち出して責めるようなことはしませんでした。」

第二の修練

1953年9月【40歳】、サルトはローマに向かい、第二の修練を9ヶ月間受けた。修練を再度行うのは古くからの伝統である。ローマにおける修練は、軍隊のような厳しい規律に縛られたものであった。しかしサルトは首尾良く修了することができた。やはりここでも彼の陽気な性格が幸いした。彼の仲間の手記を読んでみよう。

「彼も私も同じセント・ローレンス河の河口の地方の出身で、1928年からの知り合いでした。

ローマでは、彼の機転や親切のおかげで本当に助かりました。一見ややこしそうな状況でも、彼は平気でした。彼は、いつでも頼りにでき、励ましてくれる兄さんのような人でした。

修練院長は、彼に布類整理担当を命じました。彼はその仕事を注意深くこなし、ブラザー達のどんなに細かい要求にも応じていました。彼にはその仕事がこたえ、修練中に風邪を引きました。彼はちっともそういうことを言わないので、あくまで私の推測ですけれども。

11月の初めには、彼は寝込んでしまいました。食事による中毒が原因でした。体調を崩したブラザーが何人かいましたが、サルトの症状が一番重かったのです。

私は隣人のために生きて、決して自分の中に閉じ籠ることをなかつた彼の思い出を忘れられません。彼にかかると、心配することなんて何もないのです。彼の深い信仰が、主への信頼、宣教師としての才能、隣人への絶対的な愛情の源泉であると信じています。」

ローマからの帰路、彼は再び一年間をケベックで過ごし、休養をとりながらラヴァル大学で研修を受けた。

再び仙台へ

1955年4月の初め【41歳】、彼は仙台に戻ってきた。情熱的なのは以前と変わらなかった。今回は、彼は児童養護施設の園長と修道院長の重責を一身に引き受けた。彼は以前と同じ熱意をもって仕事に打ち込んだ。児童達とブラザー達のために惜しみなく尽くした。

この仙台時代の9年間が彼にとってもっとも幸福な時期であった。児童達には信者はほとんどいなかったが、それでも彼は児童達になんとか祈りを教えようと努めた。

「過ごしやすい季節の夕方には、ブラザー・ジュールは、よく子供達を連れて敷地内のルルドの洞窟に行き、そこで天なる聖母を賛える聖歌を歌ったものでした。寒い日には、聖堂に子供達を連れていき短いお祈りと聖歌を捧げてからお話を聞かせました。子供達は、おとなしく聞いていましたよ。」

彼は近くの学校に通う児童達の勉強もおろそかにしなかった。彼は先生達と努めて連絡をとり、児童一人一人の勉強の進捗状況や品行を見守っていた。

1962年1月、彼はカナダでの休暇を利用してコンプトンにおいて百日間の黙想を行った。7月に日本に戻る際【49歳】、管区長から、東京【代々木上原】に1961年に開いた学生寮の舎監を命ぜられた。8月には、修道院長も兼ねるようになった。当時修道院には、日本語を勉強中のカナダ人ブラザー達のほかに日本人の修学修士が数名住んでいた。

東京

この新しい職責には、すこし後込みをした。長い間養護施設の児童達を相手をしてきたが、東京の寮には東京の色々な大学に通学する20名の学生が住んでいる。大人と子供では、知的なレベルが全然違う。彼の日本語の知識はまだ初歩の段階であったし、語彙も限られていた。大人の青年達の心をつかむことができるのだろうか。

「ブラザー・ジュールは、東京の学生寮の舎監の仕事はどれも苦手です、とある日私に洩しました。その仕事に自信を持ったのは、急病を患った寮生にちょっとした親切をしたのがきっかけでした。

ブラザー・ジュールは、彼に自分のベッドを提供して、自分は適当な場所で夜を過ごしたのです。親切にしてもらったその寮生は、新しい舎監の心遣いのこまやかさを他の寮生達に話したのです。

『その一件には救われました』と彼は言いました。寮は美しい家族のようになり、学生達とブラザー・ジュールとは、お互いに全幅の信頼をおいていました。」

彼はまた休暇を利用して、寮生が帰省している実家を訪ね、寮生をより深く知るように努めた。その後、寮生が所帯を持つと、また訪ねていった。いやむしろ寮生の方で機会をとらえて彼を訪ね、奥さんや子供達を紹介する機会が多かった。また、彼はほとんどの卒寮生の結婚式に出席した。

彼の「大きい息子達」と暮らしている間も、彼は純真さ、人なつこさを失わなかった。彼は寮生達と酒を酌み交わすことが大好きで、どんなに風変わりな料理も平気だった。健啖家で、人生の楽しみ方を知っていた。日本語は、それほど上達こそしなかったが、流行語やくだけた表現、それに方言や俗語を覚える才能があった。

寮生が授業から帰ってくるのは夕方なので、寮生に会うために、夜遅くまで起きていなければいけないことが度々あったが、翌朝、聖堂に行くのは一番早かった。祈りが彼の情熱とバイタリティの源泉だったのだ。

この頃、修道院と、人間形成期にある日本青年とに同時に携わることが、彼にとって段々困難になってきた。どうしても、どちらかに掛かりつきりになって、二つ両立できないことが時々あった。彼にとって人生は単純素朴なものであった。彼の性格はあけっぴろげで、人間関係は正直で率直なものであった。そういう彼であったので、人間関係の細々したことは彼を消耗させた。

寮生達は彼をととても信頼し敬愛していたので、彼が転勤になることを聞くと、本当にかっかりした。

函館

実際、1966年11月【53歳】に、新しく選ばれた管区長は、彼に北は函館にあるラ・サール高校の寮の

世話をすることを命じた。サルトにしても、東京の寮生達には愛着を持っていたので、この転勤命令は彼を苦しめた。

転勤命令には容易に納得できず、その上、彼が言うには、新しい管区長はまだ正式に就任していなかったこともあり、我慢できずに抗議までした。寮生達も、東京を訪れた管区長に会いに行き、ブラザー・サルトを転勤させないよう懇願した。しかし当時函館は困難な状況下にあったので、函館のほうが優先度が高かった。学生運動の波が押し寄せる前兆があった函館には、サルトのような性格を持ち、機転に富む人物が求められていた。

サルトは転勤に納得し、彼を必要とする職責と状況に直面するために、持ち前の陽気さと元気を取り戻して出発した。函館では、20人ではなく数百人の寮生が相手だった。現在ケベックに移住している当時の寮生は、こう証言する。

「1967年4月に函館ラ・サール高校に入学して、初めて先生にお会いしました。私が15才から18才まで住んでいた学生寮の舎監をしていました。両親と離れて暮らしていたので、先生は私の生活にすぐ飛びこんできました。先生は存在感が強烈で、ときどき養父のように思うことがありました。同じように感じていた人は、寮生には実にたくさんいました。

67-70年は学生運動がキャンパスを吹き荒れていました。学校に敵対する雰囲気の中であって、先生は多くの学生たちと個人的な接触をすることができた、ごくまれな例外的な存在でした。

先生に再会したのは、1974年、東京においてでした。外国留学をするために奨学金が欲しかったのです。先生は、大学を選ぶための貴重な助言をしてくれました。そういうわけでラバル大学の名前を知りました。ラバル大学は、後に私の第二の母校となりました。3年後の1978年、私は帰国して東京を再び訪れました。帰国する前に、日野の修道院に泊めてもらうことをお願いしていたのですが、カナダ移住ビザの許可が出るのを待っているうちに、結局5ヶ月も日野に滞在してしまいました。先生は当時、日野の修道院に住んでいました。ケベックの女性と私が結婚するというので、よく先生にからかわれたものです。

先生と最後にお会いしたのは、1979年にケベックでのことでした。大手術を2回も受けた後、先生は信じられないほどの速さで回復して、私は驚きました。そのときに家内を先生に紹介することができました。

昔のままの、心の優しい先生の魅力に家内が虜になったのは、あっという間でした。先生が、もうすぐ日本に帰れるのでとても嬉しい、と言うのを聞いて、私達は深く感銘を受けました。

彼のような人に会えるなんて、私はどんなに幸運だったのでしょうか。彼の個性、天職、そしてどんな人種にも向けられた限りなく深い人類愛。彼から教わったことは、数え上げればきりがありません。彼ほど多くのメッセージを与えてくれた師は、ほかにはいません。速い歩調で腕を振りながら歩き、いつも大声で笑っていた彼の姿を、まだはっきりと思い出します。この姿が、多分彼が思い出に残してくれた、私への最後の贈り物でしょう。」

ひとによって多少の表現の違いはあるが、この卒業生が書いたことと同じ様なことを、多くの人が証言

している。サルトは、彼の好意と心づかいに浴することのできた人々の心に大きい痕跡を残した。函館の同僚のブラザーは、こう書いている。

「ほとんど毎日、夕方になると私は生徒達を寮に訪ねていました。するとジュールさんは、彼の仕事部屋で暖かく迎えて下さり、何をお願いしてもいつでもすぐに対応して、私が知りたいことはすべて教えてくれたものです。それも電話に出たり、生徒を助けたりしながらです。これ以上仕事をするのは、誰にも無理だと思いました。彼は、100%仕事に打ち込むタイプでした。」

鹿児島

函館は落ち着きを取り戻した。管区長は、彼を今度は南に送って、仕事が多すぎて助けを求めている寮の舎監を助けたいと考えた。70年の9月10日【57歳】、荷物を整理して鹿児島へと向かった。そこでは彼の責任の範囲は広くなかったが、瞬間に、彼は、先生や職員、それに生徒と親しくなった。

「鹿児島では、私は彼の上司でした。彼はあらゆることで私を助けてくれました。週に何回か、夕食後に彼と一緒に散歩をしました。彼はあらゆることに興味を持っており、ちょっとしたことにも感動する才能がありましたから、話題は尽きませんでした。彼は記憶力抜群で、地名、人名、それから何年も前に会った卒業生の名前を、よく覚えていました。」

彼の記憶力と、人への興味は、日本に限られてはいなかった。

「彼は家族や出身の小教区の人達と離れて暮らしていても、それらの人達への強い愛着をずっと持ち続けていました。ここに彼のサン・アレクサンドルでの教え子で、1930年から1973年までに死亡した人のリストがありますが、両手でやっと持てるほどたくさんあります。カナダに戻るたびに、彼は60人もいる甥や姪を全員たずねました。でも手紙はそう頻繁には書かなかったようです。」

日野、東京

1973年の1月【59歳】のことである。サルトが鹿児島に行ってから2年半になっていた。彼は鹿児島が気に入り、彼は周囲から高く評価されていた。しかしまた別のところから、彼に来て欲しいという要望があった。管区長は、東京の学生寮の舎監を、もう一度担当して欲しいというのだ。

69年から、修道士達は東京の郊外である日野市に引っ越していた。サルトは再び寮生達のもとでの使命に戻った。間もなく、修道院長も兼ねることになった。

日野では、あっという間に、寮と修道院のすみずみにまで彼の影響力は浸透した。彼は小教区委員会の一員となった。修道士達の聖堂の日曜日のミサには、近所の信者達も参加しており、サルトは、それらの人達と親しくなった。また、近くの地域のいくつかの小教区が合同で催す種々の司牧活動、特に青年団の活動には彼は必ず参加するようにしていた。

彼は修道院を開放し、ブラザー、司祭、ラ・サールの先生、学生、卒業生、若い信者、それに信者ではないがキリスト教に関心を持っている人達にまで、数日間、あるいは短期間の滞在に、修道院を利用できるようにした。ブラザー達と一緒に食事をとったり、集会のために部屋を自分で準備したり、庭でピクニックをしたりすることにより、修道院を利用した人々は、歓迎されていることを実感した。彼にとって、貧しいということは、すなわち自分のものを分かち合うこと、自分の時間や労力を人のために使うこと、いつでも人のために役立つよう待機していることであった。彼は一般の青年が使える集会所を、敷地内に建てる計画に賛同していた。



「舎監室にて」（松本修一 画）

彼がいかに奉仕に熱心であったかを伝えるエピソードを、特に一つ紹介しよう。ある夏、近くの三つの小教区が、青柳【長野県茅野市】にあるラ・サールの山荘で集会を催そうとした。ところが、山荘に着いたところで、鍵を持ってくるのを忘れたことに気がついた。そこで日野に電話すると、サルトがすぐさま鍵を持って、青柳まで電車で3時間かけて駆けつけ、彼等を窮状から救ってくれた。

彼は東京に戻って、カナダ人のレデンプトル会司祭が指導する、祈りと聖書研究のグループがあることを知った。このグループのメンバーは、フランス語を話す数人の修道女であった。彼はそのグループの熱心な会員になった。彼は、このグループにも、大きな足跡を残した。

「彼は聖書研究会に、大きな本を重そうに抱えながら、長い道のりをやってくるのでした。着いたときにはもう疲れている様子で、息も荒かったのですが、いつもニコニコして、いつでも担当の分を注釈する用意ができていました。彼の注釈はありきたりのものではなかったので、私達は彼の順番が来るのを楽しみにして待ちました。彼は、私達に、彼の純真そのものな心を開いて下さいました。彼の心は、一步一步とキリストに近づいていくように、私達は思っていました。」

「彼のような素晴らしいブラザーが集会に来て、祈りのときに絶大なる指導力を発揮して下さいと、とても励みになる一方で、大きな安心感を得ることができました。彼はよく分かるように指導して下さいましたし、彼の祈りはまっすぐに主へと向けられ、まわりくどくありませんでした。彼は謙虚な方で、グループを支援してくれ

る人として敬意を払われると、かえって居心地がよくない様子でした。」

「彼には、自分が不治の病を患っていることが分かっていました。でも他の人の気を重くさせたくなかったので、自分の最後が近づいていることを悟られたくない、と思っていました。彼は私達と過ごした最後の瞬間まで、決して平静を失わないで、自分の体調のことは構わずに、集会で自分の役割を果たしていました。」

「彼の主への信仰の深さには、本当に限りがないことを知りました。特に聖マリアへの愛情には心をうたれました。彼の口から自然に唱えられる祈りの、なんて純真なことでしょう。それを聞いていると、彼の魂にイエスの霊が宿っていることを実感しました。そして彼が日本の教会に抱いている愛情がはっきりと分かりました。」

この祈りのグループは、彼の精神的な生活を最後まで支えた。彼の部屋のドアが半開らきになっていると、彼がロッキング・チェアに腰かけて、聖書を読んだり祈ったりしているところを、日中かいま見ることがよくあった。

病気

数年の間、サルトは排尿時の痛みに苦しんでいたが、大して気にしていなかった。しかし、ある日、尿に血が混ざっているのを見たときは、さすがにびっくりした。それは、1978年の春【64歳】のことであった。初期の検査を東京の聖母病院で受け、1ヵ月入院したが、大したことはない、と診断された。彼はもう治ったと思ったが、夏に同じ症状が出た。今回は、そういう病気の診断を専門とする医者に診てもらった。その医者は、一日も早くカナダに戻ってそこで手術を受けることをすすめた。

8月からカナダに帰国していくつもの検査を受けた。診断結果はこうだった。左の腎臓と膀胱を切除する必要がある。手術は秋に受けた。膀胱を切除するのは大手術であるので、多くの人は、もうこれで終りと思った。しかし彼は驚くべき速さで回復した。そして、日本に早く戻ることを切望した。回復を待ちながら、彼はサン・ドロテア修道院の廊下で愛想をふりまいた。許可がでてからは、食堂で他の人と一緒に食事をとるのを楽しんだ。

体力がまだ完全に戻ってはいなかったし、人工膀胱にまだ十分馴れていなかったが、彼はできるだけ早く日本に帰りたい、と希望した。周囲はもうすこし待つことを薦めたが、彼は、待っていても完全に回復することはない、と考えていたのかもしれない。

出発するとき、彼は子供のようにはしゃいだ。帰れることに誇りを持っていた。79年3月の半ば【65歳】に、彼は東京に帰って院長の仕事は免除されて、どうにか再び学生寮の舎監の仕事についた。鹿児島ブラザー達は、ぜひ彼に鹿児島の院長になって欲しいと、以前から希望していたが、相談の末、東京にいてもらったほうが良いということになった。彼自身もそれで満足だった。彼はサン・ドロテア修道院の院長に、次のような感謝の手紙を書いた。

「何度も、ほとんど毎日病院に見舞に来て下さったり、また朝早く部屋にお越し下さり有難うございました。一言でいうと、修道院でのリハビリは楽しかったですよ。もうカナダを発って日本に戻ってから3ヶ月がたちます。特に大きな問題もなく、2回の手術を済ませたことに喜んでいきます。私は東京にとどまることに決めました。私もそれで満足しています。最後に、再度お礼を申し上げますとともに、ラ・サール会がキリストへの信仰において団結することを祈りながら筆を置きます。」

彼の性格の明るさは以前と同じであったが、昔ほどの体力はもうなかったので、色々調整を行う必要があった。彼は工夫の末、他のブラザーの手を煩わせないで、自分で交換できるように人工膀胱を改良した。

それからしばらくは何事もなく過ごせたが、秋に肩のリンパ節が腫れているのに気付いた。リンパ節は医者が切除したが、検査の結果、癌腫瘍であることが分かった。癌が全身に行きわたっているので、癌が猛威を振るいだすのは時間の問題だった。彼は化学療法を受け、二週間入院することに同意した。

12月に二度目の入院をしたときは、激痛に苦しんだ。修道院長は毎日見舞に訪れていたが、担当医は、修道院長に、「まだ旅行ができるうちに、カナダに帰した方がいいです」と告げた。彼自身も、病状が悪化した場合にはそうしたいという希望を、以前から表明していた。もう一度家族に会いたかったのがその理由だったが、日本の同僚のブラザー達に迷惑をかけたくなかったのである。

その翌日、修道院長は彼にそのことを話した。管区長はローマの会議に出席しており、今決断することが必要だった。サルトは、病状が速く進行していることに少し驚いた様子だった。彼は、治療をすれば回復するものと、ずっと信じていた。彼は敬虔に、平常心のままで、自分の肉体に起こっている現実を受けとめ、避けられないものを受け入れた。

12月17日、彼は退院して修道院に戻ってきた。同僚のブラザー達、友人、それから卒業生には、サルトが近いうちに旅立つことが知らされた。出発の日まで、電話や訪問が毎日相次いだ。仙台地方で、ともに宣教の仕事に携わった昔の仲間、それにドミニコ会員、ケベック宣教会員、レデンプトール会員、Scheutの神父達など、大勢が最後の別れを告げにきた。

12月29日に、彼と一緒に祈りを唱えていたグループが日野の修道院に集まり、彼と親しく祈りを捧げる集会を催した。

「ブラザー・ジュールとの最後の集いは、友情のしるしの訪問やお別れの訪問以上のものでした。それは祈りのなかのひとときでした。彼がお一人で主に捧げた祈りは、私達の心に限りなく深く染みとりました。それから彼は一段と大きな声で、彼の、あの純真さで、『全生涯を神に捧げ、全身全霊を主に捧げます』という誓いを、改めて唱えたのです。最初の宣教への旅から現在に至るまで、その間、収容所生活も体験しながら、彼の宣教の生活、そのものが祈りでした。彼は、いままでの生涯のなかで主が彼にして下さったこと、すべてについて、改めて感謝しました。最後に彼は、こうしめくくったのです。『主よ、あなたは今までずっと私にお恵みを与えて下さいました。微笑む元気を最後まで与えて下さることを信じています。アーメン』」

グループの中の女性の一人が、次のような質問をした。「本当に長い間、宣教生活を続けて来られたのですね。日本における宣教生活で、もっとも重要な点はなんでしたのでしょうか、よかったです教えてください。」

彼はこう答えた。

「それは喜びです。喜びが宣教を証言する上で最上のものです。微笑むことによってキリストの教えを広めることができます。それから全ての出来事を、悲しいことも嬉しいことも、主の真実の喜びの内に受け入れることです。そして、自分の意思を主に委ねるように努めるのです。ちょうど幼子が父親にそうするように、自分自身を絶対的に任せるのです。それも微笑みつつ、平静を保ちつつ。いつも容易にできるわけではありませんでしたが、真剣に祈れば・・・そうすると主は、そうした行為を神聖なものと認めて、救ってくださいます。」

1月12日の午後、ブラザー達は、司祭、地域の青年、小教区の信者と一緒に最後の聖体祭儀を行った。ミサを捧げる門馬神父は、こう語った。「ブラザー・サルトとは、私が神学校の生徒の頃から深くおつきあいをいただいています。私は、神父の仕事についてから、ブラザー・サルトにどんなに励ましていただいたかわかりません。ときには全部投げ出したいくなるようなこともありましたが、そういうときも励

ましていただきました。」ミサの終わりに、サルトは青年達への最後のメッセージを贈った。聴衆の一人が彼のメッセージを書き取り、それが、死亡通知のカードに日本語で記載されている。

「日本を去るにあたり、皆さんに短いメッセージを贈りたいと思います。復活の聖なる徹夜祭、復活祭前の土曜日の光の典礼の言葉を思い出していただきたいのです。それは、次の言葉です。『キリストの光！神に感謝！』皆さん、世の中を照らす光になってください。ひとりぼっちで苦しんでいる人達があります。友人を必要としている人達もいます。学校でも、クラブでも、社会でも、あらゆるところで、皆さんはそういう人達の友人となって、キリストの光を輝かせてください。キリストの光を、いつでもどこでも輝かせることが、教会の責任であり、神の民である私達自身の責任でもあるのです。『キリストの光！神に感謝！』これが皆さんに残すメッセージです。」

1月13日の行事は、寮生と卒寮生が主催した。遠く日本の最南端である鹿児島をはじめ、下関、広島、神戸、大阪からかけつけた卒寮生もいた。その日は雪が降りしきる中を、卒寮生達はこのお別れ会に大勢かけつけた。集会場は人で一杯になり、活気で溢れた。一人一人が巡り会いのいきさつを思い出し、再度、「ブラザーありがとう。ぜひまた元気になって日本に戻って来て下さい。」と述べた。着物を着たサルトは、大家族が集まった会場の中をあちこち歩きながら、本当に嬉しそうであった。この日の彼は、実際、特別の雰囲気包まれていた。悲しむ人こそいなかったが、会えるのは、今日ここで会うのが最後だと、誰もがみな推測していたし、サルトも心の中でそう思っていたに違いない。

1月15日の夕方、ブラザー達、学生、それに友人達を乗せた車が、何台も日野から羽田空港へと向かった。その他にも、直接、空港に向かう車も多数あった。彼の周りには人でぎっしりになり、あらゆる角度から、カメラのフラッシュが点滅した。彼はかなり疲れていたが、それでも最後まで立って、一人一人に心を向けるよう努めた。最後には、涙がこぼれた。「万歳」。拍手……。

日野の修道院にはポツカリと大きな空洞があいた。まだ誰にも彼が去ったという実感がなかった。彼の心と精神はまだここにある。そして誰もが、彼の生き生きとした思い出を抱いている。彼は、モンリオールで出迎えた人達に、「戻ってきたのは、もうすぐあの世に行くからですが、苦しんではいません。」と述べた。

最後の2、3ヶ月

東京で彼を診察した専門医達は、最新の医療機器を備え、最大限の努力をしたにもかかわらず、癌がどこにあるか特定できなかったが、どこかに癌があることは確実であった。カナダに戻ってから、検査が再度、徹底的に行われた。2月18日に、彼は東京の修道院長に、カセット・テープを送って近況を伝えた。

「あなたからの手紙と写真をさっき受け取りました。興味深く拝読、拝見いたしました。もっと早く手紙を書かないと、と思っていましたが、すこし具合が思わしくなかったものですから。」

まず、東京を発つ前には、あなたに色々とお世話になりました。お礼を申し上げます。ラ・サール会の機関誌 *Le Soleil Levant*（「昇る太陽」）に、記事と写真を掲載して下さい、ありがとう。あの記事は有名になりましたね。ここカナダでは、写真に写っている大勢の人達を見て、半分死にかかった人をカナダに送出すのに、こんなにたくさん人が集まったことに皆びっくりしていますよ。こんなにしてもらって光栄です。しかし寮生達は見違えるように成長しました。別にいばるわけではありませんが、今回のことが、ラ・サール寮にいい影響を与えたことには、満足して

います。

去年の夏から1月までは、それほど悪くはなかったのですが、2月の初めから、胃が少しおかしくなりました。料理を見ただけで、吐き気を催すのです。それで落ち着けません。今はどうなっているか、はっきりとは分かりませんが、内臓がやられていそうです。いずれにせよ、日野の青年達に助言したからには、自分でも微笑みは絶やさないように努めています。これからも、もし必要なら、死ぬまで微笑みを絶やさないように努めます。でも死ぬまでは、生き生きとしていられる、と思います。

お医者さんたちが病巣を見つけて、もっと私が元気になるような治療法を決めることができれば、もっと健康になって、元気になって、もっと寛大な心になってあなたのもとに戻ってこられる。そういうことまで考えています。

日野及び日本のブラザーの皆さん、日野の友人の皆さん、それから出発を見送ってくれた皆さん、11日と12日のお別れ会に来て下さった皆さんに深く感謝します。皆さんとは、最高の思い出ができました。毎日、少しずつ、皆さんのために祈っています。

修道院では、もうじき四旬節に入ります。私は、とくに断食をする必要はないと思いますが、あなたの願い事が叶うように、あなたの日本での宣教が実り多いものであるように、私の祈りのすべてを捧げます。では、最後に、さようなら。ありがとう。」

彼がカナダに戻ってから、兄弟姉妹、甥や姪が、機会を逃さないよう彼に会いに来た。しかし彼の体力が衰えていたので、訪問は、ほんの短い時間に制限された。2月末には、癌は小腸に進行した。そうすると急速に衰弱が進んだ。

昔、日本における同僚で、修道院で生活を共にしていたブラザーが、カナダに帰国して、サルトに会ったときの様子を次のように伝えている。「ずいぶん変わりました。痩せて顔色が青白く、声が、日に日に、か細くなっていってました。苦しそうなのは分かるのですが、決して苦しいと言わないのです。そして前と同じようにニコニコしながら、迎えてくれるのです。」

3月12日、担当医は、もう回復の見込みはないことを彼に宣告した。その数分後、兄弟のジルが見舞に来て、病室でミサを行った。彼はちょっと驚いたが、心の準備はできていた。彼はこう兄弟に心のうちを語った。「私は受け入れます。旅立つ覚悟はできています。もう最後です。すべきことはすべて致しました。」ジルは、サルトの最後をこう語る。

「この日は、彼に会いに行つてミサを行おうと決めていました。それは、忘れられないひとときでした。その時は、涙はでませんでした。この最後のミサは、それ自体、この上なく美しい、喜びに満たされた、平常心のなかでの体験でした。夕食後、病者の秘跡を授けました。彼はとても喜んでいました。『天国の一日だったね』と彼は言ったと思います。私は次の金曜日に、また見舞に行く予定でしたが、彼はその前日、20日に亡くなりました。」

20日に、昔、宣教の仕事の同僚であった、ブラザー・オディロ、ブラザー・ローランが、ケベックから見舞に来た。彼の意識は最後まではっきりしていて、彼等のことも分かった。彼はラジオ放送で最後の

ミサを聞き、数分後、静かに息を引き取った。【66歳】

葬式

葬式は、ド・ラ・サール会館において、3月24日に執り行われた。ジル・ベランジェ神父が、20人ほどの神父の共同司式によりミサを捧げた。聖堂は、親戚、同僚のブラザー達、それに友人達で溢れた。そのなかには、ドミニコ会員、三位一会会員、カリタス女子修道会会員、プロヴィダンス女子修道会会員もいた。

説教では、ジル神父が、自分の兄弟であるサルトとの深い精神的なつながりを強調した。信者相手の聖職と、司祭という聖職の二つの聖職の道を兄弟で歩むことにより、サルトの40年間の充実した宣教生活と、自分の40年間の聖職を比較することができたのだという。実際、40年前、サルトと、その甥でドミニコ会の神父となったジル・レヴェックとが、ジル・ベランジェが神父の初ミサで侍者として仕えた。

この葬式は、栄光と歓喜に包まれた、ブラザー・ジュールの天職のフィナーレを飾る祭典であった。聖職に就いてから今日まで、サルトはずっと自分の天職を誇りにし、ラ・サール会に強い愛着を持っていた。

数年前、彼はローマでブラザー・オディロとともに、ブラザー・ミュッシュャン・マリーとブラザー・ミゲルの列福式に参列することができた。この思い出は、彼にとって忘れられないものとなった。

日本でも、多数の友人や卒業生が3月30日に集って、彼の冥福を祈り、彼の生前を偲んだ。ほんの2ヶ月前、彼にお別れをした集会場は、人で溢れた。十数人の司祭達がともにミサを行い、東京の白柳大司教も、目立たぬように参列者に加わっていた。白柳大司教は、サルトを高く評価し、敬愛していた。

卒寮生、仙台の卒園生、鹿児島や函館の卒業生、多数の宗教団体の友人、近所の人達が、信者も信者でない人も、大勢駆けつけた。これらの人達は、皆、サルトを尊敬し、慕っていたのだ。

花で囲まれた写真の彼は、私達に苦悩を超越させて、彼の歓喜の境地へと誘うがごとく、生前よりも一層の笑顔で手招きしているようであった。この追悼録の冒頭にも掲載してあるその写真は、1月11日に、信者である幼児が、日野地域の若者からの贈り物として、十字架を贈ったときに撮影したものである。

この上もない悲しみの中にありながら、この葬式も希望の祭典となった。多くの青年達が参列したのは、彼の人の良さ、親切、好意に心を動かされたからに他ならない。

参列したある青年が、ブラザーの葬式は、いつもこんなに盛大なのではないかと質問した。ブラザー・サルトが他界した後の今日、このような反応から、皆一人一人が、ブラザー・サルトと出会って感じたものを改めて噛みしめ、現代世界に生きてきた一人のブラザーの影響力の大きさを判断できるのではないか。日本人である彼の友人が、彼が他界したのは、丁度、春の彼岸の頃である、と指摘していた。日本では、この時期に、亡くなった人を偲ぶ習わしなのである。

彼の亡骸は、モントリオールの、ノートルダム・デ・ネージュ霊園に納められている。ある卒寮生が、彼の亡骸を、日本に運んで来ることはできないものではないでしょうか、そうすれば、彼が愛していた人達の近くに眠ることができるのではないのでしょうか、と問うていた。彼の亡骸がどこにあっても、これからもずっと長い間、彼は私達の中に生き続け、愛情と笑顔で私達を励まし続けてくれることに変わりはないのである。

訳者・編集者後書き

ブラザー・フィリップがお書きになったジュール・ベランジェさんの伝記を、最初に読んだときの感動は忘れられません。戦争中、強制収容所に恩師が収容されていたかと思うと心が痛みますが、そのような状況下でも明るく強く生きてきた恩師の偉大さと信仰の力に胸を打たれます。それに最期のところは何度読み返しても素晴らしいですね。ブラザー・ベランジェには、学生時代お世話になり、心から敬愛していましたので、この伝記を訳すことができ、光栄に思っています。この訳が、学生寮OBを含め、ブラザー・ジュール・ベランジェを慕う人たちが、ブラザーのことを思い出すやすがになれば、訳者としてはこの上ない喜びです。

もとより伝語の専門家ではないので、訳の正確さには自信がなかったのですが、函館ラ・サール高等学校理事長のブラザー石井が丁寧に訳文をチェックして下さい、教会用語をはじめとして数々の貴重な指摘をして下さいました。改めてお礼申し上げます。

この伝記の訳文を、広くラ・サール関係者に読んでいただくことができるよう、ラ・サール・ネットのホームページ (<http://www.asahi-net.or.jp/~uy2h-trt/lsnetj/index.html>) に掲載する準備を行っています。鹿児島ラ・サールの先輩である鶴田陽和さんをはじめLa Salle Net運営委員会の方々には、この伝記が読みやすくなるよう、多くの貴重なご指摘をいただきました。16期の松本修一君は、表紙を飾るユーモラスな絵、及び美しい挿し絵を提供して下さいました。この文集では、経費節減のため、松本君の折角の挿し絵が白黒になってしまったのは残念です。松本君の芸術は、ホームページでご鑑賞下さい。それから小生の友人である西尾敏君には、訳文の言葉遣いなどに関して助言していただきました。また、この場をお借りして学生時代に伝語のてほどきをしてくださった、ブラザー・鈴木、ブラザー・フィリップ、ブラザー・ローランに感謝いたします。

ジュール・ベランジェさんの思い出についての原稿を学生寮OBに依頼いたしましたところ、多くの原稿が寄せられました。ジュールさんが帰天してから、ほぼ二十年が経ちますが、沢山のOBが「ジュールさんは今も自分の心の中に生きている」と証言しています。ブラザーの生き方を、自分の日々の行動指針に取り入れているOBもいます。ブラザー・ラベルとブラザー・フィリップが書いていらっしゃるように、ジュールさんは、これからもずっと、我々の心の中に生き続け、生き方に大きな影響を与え、日々励まして下さるでしょう。

今回の訳と編集に際しては、多くのOBから激励の言葉をいただきました。ブラザー・ラベルとブラザー・フィリップにも励ましと労いの言葉をいただきました。今回の訳と編集の仕事をしてよかったことは、ラ・サール会のブラザー達及び数多くのOB達と交流を深めることができたことです。ジュールさんの思い出は貴重な財産ですが、ラ・サール会のブラザー達やラ・サール学生寮の先輩後輩とのつながりも自分にとって貴重な財産である、と改めて実感しました。ある先輩がこうおっしゃっていました。

「この文集がきっかけになって、寮OBのつながりが強くなるといいですね。」

私もそう願っています。

もしよろしければ、この文集をお読みになったご感想をお寄せ下さい。ジュールさんのエピソードも歓迎いたします。送付先は、次の通りです。よろしく願いいたします。

電子メール：ty2m-smd@asahi-net.or.jp または shimadam@fusion.naka.jaeri.go.jp

住所：〒312-0042 ひたちなか市東大島3-20-7、電話兼ファックス：029-270-0575

嶋田道也（ラ・サール学生寮昭和50年卒業）